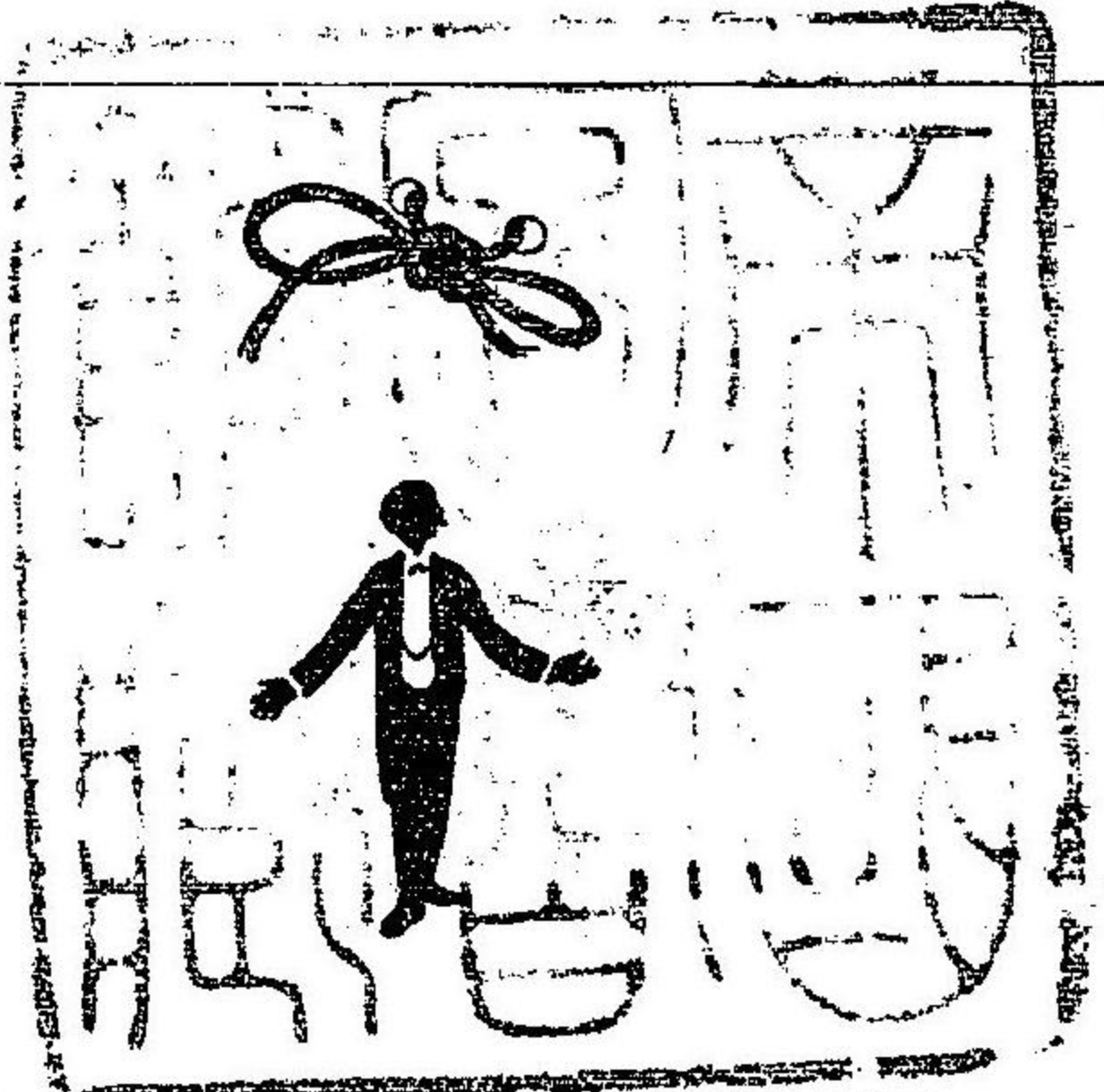


94-307



演說活法



演說活法名家談

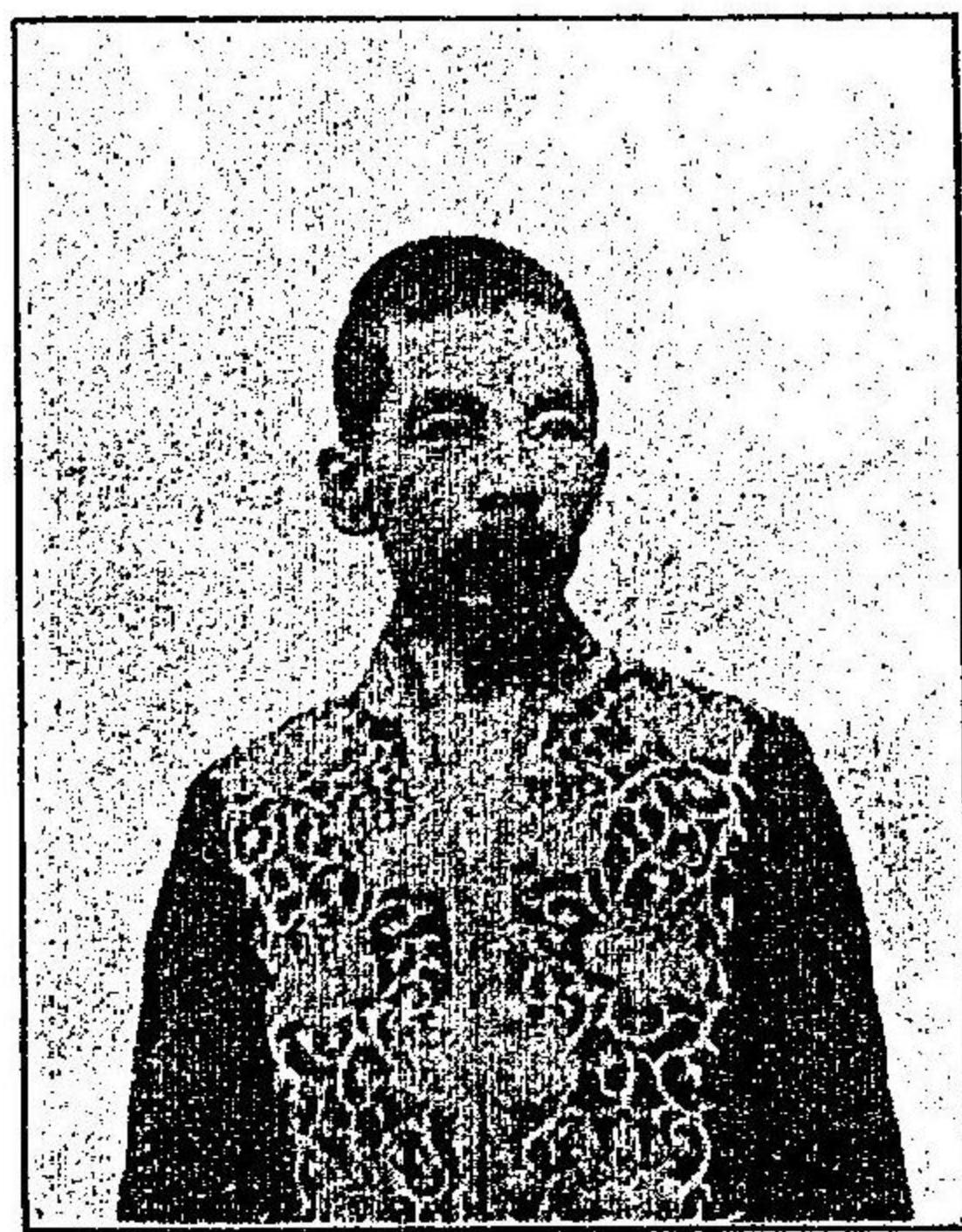


明治

1871 23

交內

博文館藏版



犬養毅氏



伊藤博文侯



島田三郎氏



大隈重信伯



大石正巳氏



尾崎行雄氏



高田早苗氏



大岡育造氏

序

我國の演説は故福澤諭吉氏を以て創始と爲す、明治八年福澤氏自ら歐米の演説法に倣ふて演説を試行し其の結果頗る良好なりしを以て、廣く知己の間に演説の効能を説き、且つ自ら之れを試行せんとを勸説し予も亦數々其の勸告を受けたり、福澤は是れより慶應義塾内に定期演説會を催ふし、職員生徒を督勵して演説を修學せしむる等盡力尠からざりしが、其の影響漸次社會に擴まり遂に政談演説の源泉を爲すに至れり。

回顧するに維新政府は進歩的政見を懷抱せる政府にして其の舉措改革頗る急激なりき故に彼の保守頑冥の徒新政に嫌焉たらざるものは往々武力に訴へて之れを顛覆せんと圖れり此の時に當りて所謂立憲的政治運動なるもの未だ起らず乃ち言論の自由發達せざる論無きのみ然るに明治六年征韓論廟堂に破裂するや翌年一月民選議院開設の建白出で爲めに朝野の耳目を聳動せり是れ蓋し進歩主義の政府に對して更に一層進歩せる政治主義を鼓吹せるものにして即ち立憲的政治運動の濫觴とも評す

べきなり是れより後政府は保守黨となり民間の一派進歩黨として相對壘するの形勢となり從來の地位爲めに一轉せり

保守的分子に在ては専ら武器を以て政府に當たりしが自由主義起てより新聞雜誌と演説は彼等の武器に採用せられ獨り民間政客の此れを以て論議を逞ふするのみならず官吏社會に於ても亦演說會を開いて其の意見を公衆に訴ふるに至れり茲に於て朝野黨然として人心頗る動けり因て政府は明治十一年七月民心を煽動し治安を妨害するの結社會合

を取締り、且つ官吏の公衆演説を爲すを禁止せり
明治十二年十二月より國會開設請願の運動起り、政
府の言論集會に於ける取締りも亦益々嚴重となり
頗る人權を拘束せしが、明治十四年七月開拓使廳官
有物拂下の議あり物論紛起爲めに其の拂下中止を
爲すに及べり、當時演説の効果頗る見るべきものあ
り、是れより相續いて自由黨起り、改進黨組織せられ、
政府も亦帝政黨を組織し自由、改進黨と相對抗す
るに至れり、而して後時に政黨の盛衰消長ありしと
雖も、政談演説は言論集會の拘束嚴重なるに拘らず、

益々盛に行はれ、新聞雜誌の發行禁停止や辯士の處
刑等頻々として絶えず、意氣の旺盛なる實に感稱に
値するものありし

然るに明治二十七八年日清戰役後は政黨先づ墮落
して人心政事に倦み、演説言論の勢力蕩然地を攘ひ、
之れを明治十四五年の往時に比すれば、遙に相劣る
に至れり、蓋し今日は利己的經濟主義流行の時代に
して一舉手一投足皆此の利己的主義より割出し、口
は禍の門なれば成るべく之れを閉づるを利とし、權
門勢家に向へば只迎合の足らざるを憂へ、役々とし

て牛馬の如く營利に奔走すると至らざるなし、往年嘗て献身的の精神を以て侃諤の議論を主張し、災厄頻々として身に迫まるも毫も顧慮せざりし剛壯銳果の意氣は今や滅焉として見るべからず、嘗に政黨社會の腐敗墮落せるのみならず、官吏も亦封建的氣風を帯び分限令を以て終身を保障せられ、意滿ち氣驕りて毫も活氣の見るべきものなきに至れり、官吏の腐敗墮落は尙輿論の刺撃を以て之れを防制するを得べし、獨り官吏の監督者たる國民が滔々として官吏と共に腐敗墮落するに至ては之れを奈何せん、

實に慨歎の至りならずや

今や正に利己的經濟主義跋扈の時代なり、即ち其の結果として營利的の新聞紙は繁昌するも演説は愈々零落し來たり、聽衆の品位も亦之れに伴ふて墮落する豈已むを得んや、然りと雖も演説は文明の利器なり、憲政扶植の爲め人文發達の爲め飽くまで其の進歩を圖からざるべからず、中島子演説活法の著あり來たり序を乞ふ予其の志を嘉みし、乃ち爲めに我國演説の概歴を説き以て序文に代ふと云爾

明治三十六年十一月

伯爵 大隈 重信 識

序

中島氏演説活法の著あり、來たりて予に序文を乞ふ、曰く本篇説く所演説は單に口舌の技術たるに止まらず、學識精神品格等相依て以て演説の骨格を成し、風姿を作るものなれば、此の邊に就ては反覆意を致たせり、然して後音聲修辭及び其の他の事項略ぼ涉説せざるものなしと、乃ち更に説いて其の詳に及ぶ予曰く果して子が言の如くなれば亦頗る予が心を得たり、予未だ該書を一讀せざるも爲めに一言なかるべけんや、蓋し演説の法たる百端なりと雖も、歸す

る所透明なる思想を以て精確なる材料を組織的に
説述するに在り、而して其の言たる簡にして要を失
せず、繁にして冗に流るゝなく、繁簡中を得て事理明
晰なれば以て聽者を感動せしむるに足るべし、演説
の法豈他あらんや、予は該書の刊成るを待て更に批
評を加ふる所あるべしと、中島氏首肯して去る、仍て
之れを序と爲す

明治三十六年十一月

尾崎行雄

例言

- 一 本書は専ら自家の経験に基いて立説したるものなるを以て
歐米諸大家の意見を採て潤色するが如きは寧ろ著者の本意に
あらず
- 一 演説を學ぶものは先進者の苦心せる痕跡に就いて工夫を下
だすを最も便なりとす、諸名家の談多くは苦心修養の痕跡を
存せざるは著者が後進者の爲め窃かに遺憾とする所なり
- 一 諸名家の談話に就いて、一定の原理を歸納し去らんには、
頗る完全なる演説法を發見し得べし、今日著者自ら之れを爲
すの暇無しと雖も、追て企圖するとあるべし
- 一 本書に掲載せる諸名家の外、尙斯道に堪能なる名士多きは

著者の認むる所なれども、普く其の説を掲載すると能はざりしは著者平素の交誼に厚薄あると、且つ歴訪の餘暇を得ざりしが爲なれば亦追て増補するとあるべし

一 模範の演説も亦精選を缺く所あり、且つ其の範圍稍狹隘に失するの感あるは亦著者が後日に増補を期待する所以なり

一 我國往年嘗て雄辯法の著述翻譯盛んに行はれしも、近年は萎微として振はず、且つ其の説く所皆歐米の演説方法を標準とせしを以て、往々我國風と相容れざる所あり、著者が歐米演説法の翻譯に依らず、之れに代ふるに名家演説談を以てせしは蓋し一種の創見なり

目次

目次	次
一 緒言	一
二 演説家と辯舌	三
三 演説家と學識	八
四 演説家と熱誠	一〇
五 演説家と膽力	一二
六 演説家と品格	一四
七 演説家と風采	一五
八 演説家と態度	一六
九 演説家と音聲(其一)	一九
十 演説家と音聲(其二)	二一

演 說 活 法

一	妨害に處するの手段	二二
一二	演説と草稿(其一)	二五
一三	演説と草稿(其二)	二五
一四	演説と言辭の關係	二八
一五	無聽衆の演説	三〇
一六	各種演説の心得	三三
一七	演説失敗の事由	三六

演説法名家

一	伯爵大隈重信君	三九
二	大石正巳君	四一

目 次

三	島田三郎君	四三
四	尾崎行雄君	五二
五	加藤高明君	五五
六	高田早苗君	五八
七	加藤政之助君	六四
八	竹越與三郎君	六七
九	淺香克孝君	七二
一〇	奥野市次郎君	七二
一一	福井三郎君	七八
一二	黒岩周六君	八一
一三	木下尙江君	八二
一四	野間五造君	八五

演 說 活 法

一五	圓城寺清君	一一〇
一六	幸徳傳次郎君	一一一
一七	大谷誠夫君	一一四
一八	花井卓藏君	一一九
一九	内村鑑三君	一二五
二〇	田中正造君	一二九
二一	安部磯雄君	一三〇
二二	高橋秀臣君	一三四
二三	加藤咄堂君	一三九
二四	武富時敏君	一四六
二五	田川大吉郎君	一五一
二六	天野爲之君	一五八

目 次

二七	植村正久君	一六三
二八	大岡育造君	一六七
二九	鎌田榮吉君	一七三

演 說 模 範	
施政の方針	伊藤博文君 一七九
外交の方針	大隈重信君 一八三
上奏案提出の理由	大 養 毅君 一九四
閣臣に反省を催がす	大石正巳君 二〇三
議員瀆職法案提出の理由	尾崎行雄君 二一六
早稻田實業學校教育方針	天野爲之君 二二八

目 次 終

難局に處する國民の覺悟……………ルーズヴェルト君二四〇
禁酒談……………中 島 氣 嶸二四四

演 說 活 法

中 島 氣 嶸 著

緒 言

○立憲政治は議院政治の謂なり、上下兩院の議員、憲法の規程に從ひて法律に協賛し、財政を討議し、或は其意見を政府に建議し、或は當局者の失政を彈劾し、若くは其の違法不正を論難攻撃する等、議院の權能を發揮し、國民の意思を代表し、之れをして周到遺憾なからしむる所以のものは、議員の任選當を得ると否とに在るは勿論なり

○然り而して、其の議員をして一々完全なる資格を備具せしめんとは甚だ困難に屬し、到底望んで得べからずと雖も、成るべ

くは、其の議員をして自家の意思を發表するに足るだけの機能を有せしめざるべからず、蓋し立憲政治は演説を以て、武器と爲すの政治にして、輿論を指道し、民意を發揚する一に演説の効力に待たざるなし、乃ち立憲治下の議員として演説の必要なるは尙ほ其の學識材幹の必要なるが如く、議員にして意思を演ぶるの機能なくんば、木像土偶と何ぞ異なる所あらんや、否寧ろ、木像土偶の旅費を要せず、俸給を食らず、恬澹無欲一々默從し去るの簡便なるに如かんや、帝國議會の議員既に此くの如し、其の他各種の議員たるもの亦何ぞ然らざるを得べけんや

○此れを外にして、學理を講じ人智を闡くの學士あり、宗教を説き人心を勸化するの僧侶あり、政治を談じて國民に訴ふるの黨人あり、法理を説いて人權を辯護するの法律家あり、其の他

種々の關係上より、辯舌使用の必要生ず、雄辯家たるの方法豈研究せずして可ならんや、予が今本篇を草して江湖に頒たんと欲する所以の主旨は、蓋し世の梗舌澁辯者流をして胸中に蓄積せる思想を發表し、以て其の天性機能を發揮せしめんとを希望するに外ならず、故に本篇を讀むもの勉焉として修練已まずんば、則ち遂に能く雄辯家たるを得んか、立憲治下の國民たるもの辯術を研究する無くして可ならんや

二 演說家と辯舌

○演説は喉舌の技術にして、總べての技術が、修養練磨を積んで精妙の域に詣るが如く、演説も亦天成の能辯雄辯と稱すべき

ものは甚だ少く、否殆んと絶無にして、其の精妙卓絶なるものは、皆修養練磨を積める結果なりと知るべし、

○古來有名なる武士が、多くの戦場を踏んで愈よ老巧を顯はすが如く、辯士も亦公衆の前に立ちて澁梗の舌を鼓し、前後矛盾の説を演べて聴衆に冷評せられ、汗顔惶惑して失敗を重ね、憤工夫を積んで而して幾百回に至り、然る後、放喉宛轉縱横自在に其の説を演ぶるを得べし、俚言に所謂好きこそ物の上手なれとは、蓋し其の真相を得たるものなり

○故に初學者に在て、先づ研究せざるべからざるは辯舌の修練法なり、抑も辯舌の修練たる平素談話の際に於いても、深く其の言葉遣ひに注意して誤謬倒錯なからんとを期し、且又常に語調の節整に留意せざるべからず、語調緩漫に失すれば、其の演

説緩漫にして氣勢なく、聴者を倦ましむるの恐れあり、又其の語調輕佻に流るれば、其の演説輕佻にして、威嚴無く、聴者に侮蔑の念を生ぜしむ、故に演説家たらんと欲するものは、平素其の語調を節整して輕佻に流れず、緩漫に失せず、念々恰好程度に在らんとを忘るべからず

○然も之れ禪理を説くと一般、初學者捕風の歎あるを免れざるべし、故に予は茲に惟だ簡明に、遲鈍にして緩漫なる辯舌者には、常に快疾にして激切なる語調を用ゆべく、又輕佻にして多辯なる者には、沈着にして重厚なる語調を用ゆべしと勸告せんと欲す、而して其の之れを修養練磨するは、一に舌と喉との作用に存すべきを以て、細心工夫して其の目的を達するまで敢て倦怠するとあるべからず（演説と音聲との關係は下文に記す參

照すべし)

○予は幼時舌根梗澁して殆んど日常用談を辨する能はず、今日尙記憶に存する所の一笑話あり、幼時小學内篇の素讀を受くるに當たりて、「公門に入れば、鞠躬如たり、容れられざるがごとし」と云ふ一句に至り、幾日か之れを繰返へして終に「容れられざるがごとし」を摸誦する能はず、教ゆるもの習ふもの共に困倦して茫然自失したる事ありし、之れ蓋し其の一斑なりと雖も、以て予が短狭舌は天然の命賦なりしを徴するに足るべし、

○其の後予年稍長するに及んで、演說修練の希望を起こし、泰西演說家の傳記を讀で感發する所あり、乃ち先づ一二の得意なる書籍を取りて之れを高聲に朗誦し、且讀み且講じ宛然演說家の口調を以て、辯舌と音聲を練磨すると数年、其の間集會の席

宴會の節、機會だにあれば必らず一場の演說を試みざるなく、時に又夜中山中に入りて無人の境に演說を試むるが如き、往々奇狂の行動を爲したるとありし、

○後學校に入りて教鞭を執るに及んで、日々講義に演說的口調を用ゐて益す練磨の功を積むとを得たり、明治〇〇年中學校を辭して高知日報社に入り、編輯の傍ら地方遊説を事とするに及んで、演說を爲すと益す多く、前後通じて二百回に上ぼれるなるべし

○此の間予は常に孤軍の陣頭に立ちて、強大なる反對黨と戦ひ十有餘年を通じて敗北に終始せしかば、往々言論の戦場を化して腕力の闘争場となし、甚だしきは一回の演說中三回まで打撲を被むり、遂に演壇上に顛倒せるが如き珍事ありし、

○其の他演説中若くは其の前後に於いて、反對黨の襲撃に逢ひ、傷害を被むると幾回なりしを知らず、反對者喧噪紛囂して演説を妨害せしが如き殆んど常事なりし、

○予は此くの如く天然の命賦と戦ひ、兇暴の政敵と闘ひ、幾多の活劇場を經過して來たれるを以て、平穩無事の境裏に辯舌を修練せしものに比すれば、多少素養の異なるを自負せずんばあらず、初學者の爲め聊か予が修練の顛末を叙し以て之れを策進すと云ふ

三 演説家と學識

○巧妙なる演説家たらんと欲せば、辯舌の修練のみを以て足れりとせず、學識を研き材料の蘊蓄を圖らざるへからず、蓋し演

説を聴くもの徒らに感動喝采して聴演後、其の腦中に何等の痕跡だも留めざるは、畢竟辯舌の巧妙に伴ふべき開發の材料乏しきが爲めにして、氷葉心が文章風教に裨益するなくんば工と雖も取るに足らずと言ひしは移して以て演説を評すべし、

○之れを要するに、辯舌巧妙にして學識足らざるものは、聽者を感動せしむる割合ひに實効少く、學識餘りありて辯術の修練足らざるものは、言辭澁梗にして論旨明快ならず、爲に往々聽者の厭倦を招かざるを得ず、學識辯舌及び熱誠の三者相兼ねて、始めて完璧に庶幾しと云ふべし

○予が從來實驗する所によれば、辯士自身に最も心強く感ずる所のものは、演説の材料精確なるに在り、如何なる反對者と雖も、此の論旨に向ては一矢相酬ゆる能はざるべしと自負するに

在り、是れ管に意氣を激勵して自ら強くするにあらず、衷心自然に爾く信ずるに在り

○此くの如く辯士自ら深く頼んで演壇に向へば、意氣莊重、態度安詳自ら聽者を感動せしむるものあらん、初學者演説を修練すると共に、必らず學識の蓄養に務めざるべからず、之れを偏廢せば、雄辯家として見るに足らざるなり

四 演説家と熱誠

○既に雄健なる辯舌あり、又深厚なる學識あり、辯舌材料兩つながら備具して、尙演説家の資格全しと云ふべからざるは何ぞや、曰く熱誠を缺げばなり、熱誠は譬へば龍を畫いて睛を點ずるが如く、演説家にして熱誠内に充滿せざれば、其の演説たる

氣魄無く、其の態度たる輕忽にして聽者を心服せしむる能はず、
○彼の精神凝て白日神を見るが如きの熱誠あり、而して後言々血となり、語々涙となり、辯士我れを忘れ、聽者も亦己れを忘れて、兩者恍然夢中に心會するなり、然らば則ち如何にして其の熱誠を養ふべきや、曰く是れ孟軻の浩然の氣と一般、且つ問ふを已めよ、苟も其の演説をして必要已むを得ざる公義心に出でしめば、其の誠心氣魄自ら充溢して人を感動せしむるあらんのみ
○彼の政府の失躰を彈劾し、反對黨の暴横を攻撃する政黨員の演説中往々聴くべきものあるは、畢竟憤慨の氣内に充滿すればなり、怒り極て而して後言ひ、喜び極て而して後言ひ、悲み極て而して後言ふ、此くの如きは實に人情已むを得ざるに出づるもの、其の演説たる活氣なからんと欲するも得べけんや

○予は從來自家の演説に經驗して、憤慨の餘に出でたる演説最も氣魄に富むを覺知せしが、帝國議會の演説に徴するも亦同様なるを知れり、蓋し此の理を推して他に及ぼすに、演説の氣魄あるもの必らずしも論難攻撃に止まらず、彼の道理を信ずると篤く、一世の蒙を闡かんと自任する大人君子に在ては、其の言論自ら熱誠に富まざるを得ざるべし、

○孟軻の所謂我れ豈辯を好まんや已むを得ざればなりとは、蓋し辯士一般の心事たらざるべからず

五 演説家と膽力

○演説家に膽力必要なるは、猶武士の膽力を主とするがごとし、初心者演壇に登りて意氣暢びざる所以のものは、畢竟聽衆を畏

憚する心あるが爲にして、彼れや學識あり、此れや見聞博し、我れ或は及ぶ能はざらんと、苟も此くの如き畏憚の心起れば俄に自ら鞭撻奮勵せんと欲するも得べからず、到頭壇上に立ズクミとなるの外なからん、故に辯士の演壇に登らんとするや、須らく先づ聽衆を一吞するの膽氣なかるべからず、滿場幾百千の聽衆を見ると人形の如く、我れ自ら之れを操縦するの實權を掌握せりと思へば、自然意氣發旺し來たるべし、

○然も此くの如き雄大なる意氣は、幾十回も難戰場を切抜けたる後にあらずんば、發生せざるを以て、初心者は只古武士の南無妙法蓮華經を唱へて敵陣に突入るが如く、此所決死の勢ひを以て演壇に登るべし、之れを久ふして自ら老練し去らん、其の壇上辯士なく、壇下聽者なきの妙境に至るは、遠き未來の事な

りと知るべし。

六、演説家と品格

○辯舌爽快にして、學識之れに伴ひ、其の演説や聴くべきものあるに拘はらず。往々人の嫌忌を招くは何故ぞや、蓋し辯士の品格卑陋にして聴者に敬愛の情起らざればなり、我が某々名士の如き實に其の適例にあらずや、此くの如きは畢竟平素道義の修養薄く、士人の節操を輕視して社會の指彈を被むりたる結果に外ならず、演説家の品位を養ふ豈他あらんや、士人の面目を保ち社會の信用を博するに在るのみ、

○彼の高僧碩徳の説教が、聴者に隨喜の涙を注がしむる所以のものは、畢竟其の人物の崇高にして他を心服せしむるものあれ

ばなり、品格貴く、地位も亦高きを加ふるに従ふて、崇敬の情を博するは自然の理なり、演説家たるもの豈深く修養せざるべけんや

七、演説家と風采

○容貌、風采は演説家の品位を揚ぐるに於いて非常なる關係あるべしと雖も、容貌は元來天然に出づるものにて、風采も亦人爲的に左右すべからざるものなれば、凜生容貌風采の揚らざるものは、如何に貌采を善くせんと欲するも何等の効果無かるべしとは一般に爾く觀念して疑はざる所なり、然も是れ恐らく完全の觀念と云ふべからず何となれば容貌風采は天然に備具するものなりと云ふも亦修養練磨の効を積んで益々之れを潤色し得べ

さものなれば、一概に天然のものとし、人爲に左右すべからずと諦むるは輕忽なりと云はざるべからず、

○古人の所謂心廣く體胖なりとは、即ち修養の結果を意味するものにして、天然の品性の然らしむる所とのみ云ふべからず、古哲人ありト者をして己れを相せしむ太だ凶なり、ト者去て後哲人門下をして再びト者を迎へて相せしむ稍吉なり、此くの如きと再三トする毎に愈々吉なり、ト者乃ち筮竹を投じ喟然として歎して曰く、噫先生の玉貌一に何ぞ此に至るや予淺學天人に通ぜず今後誓て筮竹を把らざるべしと、門下哲人に其故を問ふ、哲人曰く是れ豈知り難きの事ならんや、彼は面を相して心を相する能はず、我心向上變化して面相も亦之れに従ふのみと、修養を積み鍊磨を重ねれば精神自ら充ちて溢るゝに至るべし、彼の

體度安詳風貌和穆而も凜乎として一片犯すべからざる氣象を具するが如きは、何人も修養鍊磨を積み求め得らるべき事柄なり、

○風貌の美なると醜悪なるとに拘はらず、精神的修養に依りて之れを潤色せんとは何人も念頭に忘るべからざる所なり、特に風貌の醜悪なる人に在ては、精神的發展と辯術の修練とを以て之れを補充するの覺悟甚だ必要なり、辯士登壇するや聽衆一齊先づ敬愛の情を捧げて之れを迎へ、人は見掛けに依らぬものなりと感歎の情を以て謹聽せらるゝに至らば、風貌の醜悪は却て其の人の特徴となりて益々社會の同情を惹くに至るべし、故に如何なる人も自ら侮らず發憤勉勵せんと肝要なり

○其の服裝の如き特更に華美人目を引くを要せずと雖も、之れ

を輕視して野卑に流るゝは亦務めて避けざるべからず、古人の儀容を重んずる辯士に於いて特に然るべきなり

八 演說家と態度

○演說家の態度に於ける、亦頗る留意せざるべからず、其の態度沈着にして輕忽ならず、重厚にして活氣あり、意氣の熱すると共に眉目揚がり、言辭の激するに従ふて態度も亦活氣を添へ來たる、之れ自然の情理にして其の間務めて矯飾を用ゐず、何事も天真爛漫性情の自然に發するを可とす、

○世間の演說家中には演說中數々其の身體を左右に轉回し、或は前後に俯仰し、或は壇上に運動しつゝ演說を爲すものあり、是等は甚だ見苦しければ、初學者務めて之れを避けざるべから

ざるなり、

○然らば則ち演說中の態度は如何にして可なるか、予の見る所を以てすれば、大體不動の姿勢を取りて、頭手適宜の作動を爲すを可とす、

○彼の歐米演說家の態度を説明せる書中、喜怒哀樂の表現を器械的に教示せるは、宛も演劇の振付けに似て滑稽に類すれども、之れを習熟して自然の境遇に至れば、其の演說を補助すると大なるべし、

九 演說家と音聲 (其一)

○演說家たるもの、尤も音聲の緩急高低に留意せざるべからず、緩急高低の調和は演說をして大に趣味を生ぜしめ、又辨士をし

て、疲勞少からしむ、蓋し音聲の緩急は思想の輕重を意味し、聽者をして其の主意の存在する所を領會し易からしむ、若し初めより單調に變化無く一直線に進まんか、十里の長堤願望の情景無きが如く、自ら人をして厭倦を催ふさしむ、

○我が演說家中終始演べ續けにて、調子の變化乏しき某名士の如きものあり、或は終始高聲にて怒號雷轟の如き惡感を起さしむ、某代議士の如きものあり、緩急高低の調和は演說家に取て頗る困難なる事なりとす

○之れが修練法として、平素文章の朗讀に務めて抑揚緩急を用ゐ、又此の心得を以て長篇の詩歌を高吟低誦する等、若くは近來流行の謠ひを練習するが如き、其の他種々の方法あるべしと雖も、要するに、演說毎に自ら注意して工夫を用ゆるを第一と

す、座上の水練は往々實地の用を爲さざるものなり

○我邦中長野高知兩縣人は天然の好音あれば、音聲修練を志さずものは兩縣辯士に就いて研究すべし、必らず得る所あらん

十 演說家と音聲 (其二)

○演說を爲すには、音聲の蓄養に注意せざるべからず、初めより高聲を發して終始之れを一貫せんとは、到底初學者の能くする所にあらず、大抵中途に音聲枯竭して、降壇を餘儀なくせらるゝか通例なれば、初學者は宜しく初めに其の音聲を低くし、後漸次之れを高くし去るを要す、此の如くにして音聲の蓄養に注意せば、中途枯竭の恐れなかるべし、

○演說中の飲用物は微溫湯を可なりとす、冷水は發聲を害する

の恐れあり用ゆべからず、

十一 妨害に處するの手段

○予は從來反對者の妨害を被むる毎に、一種の慰安法を利用して難關を切抜けたると少からず、并は蓋し反對者が如何に躍起喧噪するも、幾百聽衆中には必らず十人や二十人の熱心に我が演説を聽かんと欲するものなきにあらず、故に予は専ら此の少數同情者に向て演説を爲すの覺悟を以て、一切他の喧噪者冷評者を顧みず、循々として演説を爲しつゝ時を移せば、喧噪者も自ら倦で沈黙し、冷評者も亦自ら慚ぢて冷評を止むるに至ると之れなり、

○若し妨害者にして喧噪止まずんば時に霹靂の威喝を爲して左

の如く宣言すべし、曰く諸君にして喧噪を止めずんば予は斷じて此の席を降らず、以て諸君の沈靜を待つべしと、此くして聽者漸く沈靜せば再び妨害の起らざる内に成るべく速に演説を結了すべし

○予は又聽衆の妨害に對して終始大聲に演説を繼續し以て妨害を無効ならしめたる事多し、音吐鐘の如く修練充足せるものに向ては妨害者も亦如何ともすべからざるなり

十二 演説と草稿 (其一)

○演説に草稿を用ふるものと、否らざるものとあり、草稿を用ふるは、演説の條理を正ふし秩序を明らかにし、論旨の存する所を遺憾無く聽衆に徹底せしめんが爲にして、草稿に依れば是

等の利益ありと雖も、却て此れが爲に記憶を薄弱ならしむるの恐れあり、

且つ草稿依頼の心生ずれば、即席に演説を試むるが如き機敏の事を爲す能はず、往々演説を爲すべき好機會を逸するとあり、

○之れ蓋し草稿演説の弊たるに相違無かるべしと雖も、予は初學者に向ては、常に草稿に依り嚴肅に演説を爲さんとを勸告すべし、否らずんば、往々演説を等閑に附し、却て惡弊を助長するの憂ひなしとせず、

○初學者假令草稿を用ゆと雖も、一たび演壇に登れば、心思惑亂眼光文字を照破する能はず、聽衆若し是れに向て冷評を加へ降壇を催がせば、益すく逆上して椽大の文字も之れを認識する能はず、昏亂眩倒して喧騒場裏に埋殺せらるゝなり、

○此に至て、原稿の有無は何等の關係無きに似たれども、漸次場數を踏むに従ふて草稿と演説と略ぼ一致するに至り、更に進めば草稿も亦殆んど無用なるに至るべし、尤も彼の財政等に關する計數上の説明を爲すに當ては何人も大抵草稿に據らざるを得ざるべし、

○我國の政治家中記憶精強に草稿を用ゐずして、長時間の數字的演説を爲し得るものは唯一の大隈伯あるのみ、然も此くの如きは例外にして以て一般を律すべからざるなり

十三 演説と草稿 (其二)

○演説を爲さんと欲せば、先づ第一に今回は何事に就いて演説せんかと適當なる題目を撰擇せざるべからず、問題既に定まれ

ば、次に此の演説の主旨を如何せんと尋究せざるべからず、是は演説者の最も苦心すべき所にして、苟も其の主旨定まらば、之れを布演して前後の配置を爲すと難さにあらず、此くて而して後、之れを草稿に移し、更に一段の鍛錬を経ざるべからず、

○故に初學者に在ては、一演説に就いて、三段の難關あるを覺悟すべし、一は思想の考究にして、二は草稿の鍛錬、三は即ち演説なり、

○演説は最後の難關にして、初學者の最も畏るゝ所なれども、苟も思想の結構成り、草稿の鍛錬充分なれば、演説も亦頗る容易なるを感ずべし、故に初學者に在つて先づ方を盡くすべきは中段の草稿鍛錬に在り、

○草稿は思想を明確にし條理を疏通するものなれば、幾度か草

稿を修正鍛錬して、意思の安んずる所に歸着せしめ、是れならば大丈夫反對論者を屈伏せしむべし、假令屈伏に至らざるも、我論據を打破せらるゝが如きとは斷じて之れなしと確信するを要す、

○此くの如く思想も熟し、加ふるに確乎たる意思を以てすれば、演壇に登て必らず多分の勇氣を保有し得べし、

○草稿既に成て後は決して演説の成敗に頓着すべからず、須らく悠然として相關せざるが如く、以て其の時の至るを待つべきなり、

○予が實驗に依れば、草稿は只其の綱要を記するに止めて可なりと雖も、初學者は思想鍛錬の爲め、必らず之れを詳細起草するを要す

○之れ單に演説の爲めのみならず、文章修辭の上に於ても利益少からざればなり

十四 演説と言辭の關係

○演説は簡潔明瞭を旨とすべきは勿論なれども、一概に之れを墨守すべからず、何となれば演説は思想の發表なれば、其の長短も亦思想の厚薄と相伴はざるべからず、故に大問題に就いて材料頗る饒に思想も亦豊熟なれば、其の結果として演説の長時間に及ぶは當然の理なり、若し重大なる問題に對して強いて簡潔に之れを説明せんと欲せば、所謂意盡さず、辭足らざるの譏りを免るゝ能はず、禪家の法談を聴くと一般要領を得ざるものとなるべし、故に初學者は演説の長短に意を留むるを要せず、只

○其の問題を説明すべき材料の精確に明白ならんとを期すべし、而して其の思想たるや之れを草稿に移して鍛鍊數回せば、自ら整然として前後重複の憂ひ無く、明瞭に演説し得らるべし、若し大問題に就いて豫め草稿を作らず、腹案の儘登壇せば、其の演説たる必らず冗長多岐に流れ前後矛盾して聽衆の冷評を贏ち得るに過ぎざるべし、

○歸震川曰く、文章意思の勝れたるものは辭愈々樸にして文愈々高き、意思勝れざるものは辭愈々華にして文愈々鄙なりと、此の語移して以て演説を説くべし、蓋し演説は意思を主とする者なるを以て、意思豊熟なれば特更に言辭を彫琢するの必要無く、樸實の辭を以て胸中の思想を演べ去り得べし、彼の言辭を彫琢して無用の舌を鼓する者は、畢竟思想の乏しきが爲にして、聽

者をして厭忌の念を生ぜしむるは免かるべからざる次第なり、故に演説を學ばんと欲するもの徒らに言辭を華麗にせんよりは先づ思想の豊熟を圖らざるべからず、思想豊熟なれば言辭の華なると樸なるとは意思の擇ぶ所に從ふて自ら自由なるべし

十五 無聽衆の演説

○予が郷里に劍術の師あり、一門弟遠路來たり學ぶ、師不在なれば、乃ち自ら武装して柱楹と相撃ち刻を移して歸る、人以て狂と爲せり、演説家たるもの必らず這般の心掛けなかるべからず、演説を爲すに聽衆多數なると、少數なるとは、辯士の感情に於て非常の差あり、然も多數聽衆に向て意氣得々たるものは、未だ多數の喧噪妨害を知らざるものなり、少數聽者に向て戚々

たるものは、未だ演説修養の功を積まざるものなり、千人に對すると百人に對すると、百人に對すると十人に對すると、演説を爲す上に於て、何等の輕重を爲すべからず、要は我れ自ら其の職責を盡すに在りて、聽衆の多寡は我れの關する所にあらざると覺悟せざるべからず、辯士にして此の覺悟あれば、意氣自ら安靜に、聽衆の多寡に因て、演説に出來不出來を生ずるが如きことなかるべし、

○予は政黨演説に奔走し、數々敵黨の根據に切込んで演説せしが、敵黨は是れに對して大舉して來たり妨害を爲すか、若くは傍聽者を抑制して、演説を無効に歸せしむるか、此の二途に出づるを常とせり、喧噪に處するの方策は既に別項に記せり、聽者抑制に對しては如何なる方策を取りしか、予は多くの場合に於ても

敵黨の妨害に脅從せざるもの五六人之あるを見たり、乃ち之に持參聽衆（同志者にして辯士防衛旁々行くもの）を合して十餘人を得ば我望み足れりとし得々と演說するなり、此くの如きと往々之あり、甚だしきは持參聽衆のみに向て演說して歸るとあり、敵黨新聞紙冷評して曰く、彼れは柱に向て演說せり、他に何人も聽くものなかりしと、然り眞に柱に向て演說を爲し得るものは、練磨の功を積むにあらずんば決して爲し能はざる所なり

十六 各種演說の心得

○攻撃的演說は感情の激發に因るものなれば、自ら過激に流がれ易しと雖も、之れが爲め決して理義を失ふべからず、條理整然として論鋒切實なる時は、濃厚なる長者も尙感激せざるを得

ざるべし、而して其の演說中情勢の激する所、腕を扼し案を拍て大呼するが如きは覺えず知らず然るものにして、漸次習熟せば次第に演說の氣勢を添加し來たるべきなり

○辯護的演說は本來同情を基礎とするものなれば、情理相兼ねて懇切なるを旨とすべし、情に馳せて理を輕んずる如きは尤も慎まざるべからず、隨て其の態度音調聽者の感情を害せず、冥々裏に其の目的に同化せしむるを心掛けざるべからず、

○就中政府辯護演說の如きは、政治家の時として甚だ困難を感ずる所にて、我帝國議會に政府彈劾問題起る毎に、政府黨の政府を辯護するや、氣燄揚らず、論旨も亦濫晦を極めて、喧噪場裏に埋殺せらるゝは世人の知る所なり

○説明的演說 は從來帝國議會杯に於て政府委員等が、一種の

不得要領の言辭を弄して巧みに議員の鋒先きを切抜けしを珍重して、説明演説は是れに限るが如くに云ふものあれども、是等は畢竟俗吏等が自家の短所を掩ひて事の面倒を避けんが爲めに弄用する狡計にして、説明演説の模範となすべからざるは勿論なり、蓋し説明演説の要旨は、或る議案若くは或る問題に就いての疑問を明瞭に餘蘊無く領解せしむるに在れば、説明の懇切なると、事理の明確とは相待て離るべからざる關係あり、特に反對的趣味を含める場合ひに於ては、溫和正實に他の感情を害せざるよう注意せざるべからず、然も其の言辭餘りに卑屈に憐れみを乞ふが如きは斷じて不可なり

○學術的演説は、理義の明白に徹底せんことを目的とせざるべからず、公平精確を旨として循々説明すべく、此くの如き演説は

無味乾燥に流れ、聽者の厭倦を來たし易きを以て、宜しく注意して演説に活氣を帯びしむべし、而して辯士の態度は高尚にして言語も亦務めて雅潤なるべきは勿論なり

○説教的演説は、専ら聽者の信仰心に訴ふるものなるを以て、崇高慈愛の態度を以て懇切に演説せざるべからず、辯舌態度心情の三者相兼ねるにあらざれば、真正の説教家と稱すべからず、特に心靈の修養は感化の中心たるべし

○頌讚的演説は、其の人物の徳行事功を頌讚するを以て目的とするものなれば、態度言語共に平和に愉快に満腔の同情を捧げて其の功勞事蹟を説明すると同時に、一般人士に其の感化を及ぼすことを務めざるべからず

○哀悼的演説 言々哀悼の誠心に出てざるべからず、輕佻の態

度と浮華の言辭を用ゆるとは慎むべきなり

十七 演説失敗の事由

- 從來演説家の失敗を招くは、其の事由一にして足らずと雖も、左の數項は蓋し其の原因なるべし、讀者前來記述の各項と、相對照して研究する所あるべし
- 資望足らざる事 辯舌學識餘りありと雖も、地位德望他と比較して及ばざる時は、其の演説も亦他の効績に劣らざるを得ず、
- 聲聞實に過ぐる事 聲聞の高さに反して、演説頗る巧妙ならざるものあり、爲に聽者の侮蔑を招くと少からず
- 論旨高尚に過ぐる事 聽衆智識の程度に比して、論旨高尚に過ぐれば、所謂大聲俚耳に入らずにて聽者をして自ら厭倦せざるを得ざらしむ

- 態度輕佻に失する事 態度輕佻なると藝人の如くなれば、其の演説聽くべきものありと雖も、人を感動せしむるに足らず、所謂演説遺ひの譏りを免れざるなり
- 惡口罵詈に過ぐる事 惡口罵詈に過ぐれば、一般に感情を害して面白からずと雖も、特に反對者の多き所に於いて、惡口罵詈を逞ふせば、一層反動を惹起して失敗に終らざると少し
- 反對者の防衛に基づく事 反對黨の根據を衝き、一舉勝敗を決せんと欲する場合には、往々一大紛擾を惹起するとあり、此際に處しては機智膽略ある者に非ずんば失敗を免る能はざるべし
- 演説の冗長に失する事 辯士の最も聽衆に非難せらるゝは、主として演説の冗長に在るが如し、長演説は雄辯者にあらずん

ば、聴衆に満足を與ふる能はざるべきを以て、未熟者は之れを避けざるべからず

○論旨の晦澁なる事 多くは思想の不熟練と、辯舌の澁梗に因るものにて、冗長と共に演説家失敗の主因なり

○演説の重複に因る事 前席の辯士が如何なる演説を爲せしかを知らず、之と類似の論旨を反覆すれば、聴衆侮て以て前者を摸倣すとなさん、多数辯士の演説會には往々此くの如き失躰あり

○辯士の激動し易き事 聴衆より種々の悪口を受けて冷然看過する能はず、心情次第に激動して遂に理性を失ふに至るとあり、畢竟修養の足らざるか故なり

○音聲の枯竭する事 音聲の修練足らざる辯士にして、高聲に演説せば往々中途に退壇するとあるを免れず

演 說 法 名 家 談

伯爵 大隈重信君

○予は演説の經驗に就いて一も語るべきものあるなし、然も演説は感情を飾りなく言葉に寫出すべきものにして、拵事は巧妙なるも人を感動せしむるに足らざるを信ず、彼の名優市川團十郎が安宅關の辨慶に扮して、巧妙の技藝を演ずるとも、其の事既に拵事なれば、何と無く物足らぬ心地せらるゝなり

○演説を以て一種の技術と爲し、喜怒哀樂の表現に従ふて種々の形式を教え、怒る時は語を強くし、喜ぶ時は語を和らげ、樂む時は之れを優美にし、悲む時は之を悽涼にする等、技術とし

て研究すれば種々の方法あるべしと雖も、予は一も此くの如く形式的に研究したる事なく、只感情を其の儘言葉に寫出して人に訴ふるのみ

○破廉耻なる人が道德を説くも何人も之れを信ぜざるべし、政治的罪惡者が躍起して國論を動かさんと欲するも國民は容易に動かざるべし、何となれば人皆彼等が心情を知り、性行を厭忌すればなり、故に國民を動かさんと欲するものは、精神的血誠を據べざるべからず、悲憤の感情内に燃えて之れを言論に發表せば、國民も亦感激して蹶起せん

○予は熱誠に感情を言葉に寫し去るの外、演說に於て何等の經驗あることなし（談話に據る）

大石正巳君

○雄辯法 政治壇上にせよ、宗教壇上にせよ、教育講座にせよ、宴會席上にせよ、苟も一場の演說を爲さんと欲する時は、必ず其の主義目的なかるべからず、演說は即ち巧みに之れを發言して、聽者を感動せしむるの手段なり

○感動の起因 新知識によりて聽者の知らざる點を言ひ、思はざる範圍を語り、着々意表に出づるにあらざれば、千言萬語するも何等の効能なかるべし、次は意匠組織に在り、假令材料豊富なりと雖も、巧みに之れを組織するにあらずんば用を爲さず、例へば良材珍石を集むるも未だ以て美觀と爲すべからず、之れを大厦高樓に仕組み、庭園池水に配合して始めて人目を嬉ばし

むるが如し、組織安排は尤も留意せざるべからず

○心の態度 登壇の辯士は沈靜にして精神を込め、一言一句も誠實より出でざるべからず、其の口に發する所は、必らず深く自ら信ずる所ならざるべからず

○言語の品位 務めて平易解し易さを撰び、卑陋なる言語を避くべし、且つ深く人身の攻撃を戒め、滑稽戲言を慎まざるべからず、假令論説上の攻撃に涉る場合と雖も、言語極めて上品に、見解公平を失ふべからず

○身體の姿勢 一舉一動自然に出づるに在り、求めて尊大を装ひ、又輕卒に流るべからず、顔色容貌威嚴を有すると同時に、舉措亦禮讓に適はざるべからず、倨傲は人の惡む所となり、卑賤は人の厭ふ所となる、故に犯すべからざる威嚴を備へて、敬

愛せらるべき禮節を守らざるべからず

○演説の標準 演説は聽衆に因て加減を加ふべく、常に其の聽衆中の最も知識ある少數部分を相手として演説せざるべからず、此の有力なる少數者を味方に取れば、多數は自然に隨ひ來るものなり(寄稿に據る)

島田三郎君

○演説家たるには、古人の演説集を多く讀んで之れを咀嚼翫味すると肝要なり、蓋し古人の演説は天然の能力を發揮して自ら範則を成すものなれば、之れを熟讀翫味するに従ふて自然演説の妙味を悟り得べければなり

○歐陽永叔は文章に就いて三多を説き、多く讀み多く思ひ多く作るを以て要訣と爲せり、演説に於ても亦然り、古人辭を修めて其誠を立つと言ひしが如く、演説は自分の意思を明白に發表し、人をして自分の意思を理解せしめ同感せしむるを以て目的とするものなれば、多く場數を踏んで修練を積まざるべからず、彼の抑揚緩急照應結束等自然の法則出來し、能く人を感動せしむるは皆之れ修練の結果たるに外ならず、要するに場所に馴れると材料の多さと演説に餘裕を生ずると、此の三者を兼ねるに至て始めて演説の用を遂くべしと思ふ

○演説にも種別あり、説明演説あり、駁撃演説あり、其の孰れたるにもせよ、多く材料を蓄へ之れを論理的に吐出すると最も必要なるべし、古來和漢學者が徒らに材料を蓄へて之れを巧みに

に應用する能はざりしは、畢竟論理的に整理使用する方法を知らざりしが爲めに於て、歐陽永叔の三多法に従へば、文章も演説も皆十分に之れを應用するを得べく、文章と云ひ演説と云ふも、歸する所は、思想の發表に外ならずして、其の目的はなるのみ

○英國にては議院を以て演説の本場と爲せり、日本も會場演説大分行はるゝに至りしが、此の會場演説は極めて必要にて、後來雄辯者を出だすべきは此の場所なるべし

○又裁判所演説は日本にては、辯護上の利害より多く演説を控ゆるの傾きありて、未だ此の内より雄辯家を出だすに至らざるも、英佛米等にては、犯罪者辯護の爲め非常なる雄辯家を出だすあり、佛國のガンベッタが國事犯罪者辯護の演説中、佛帝那

翁三世を彈劾して國民に背きたる謀叛人なりと痛論したる時の如き、法官も一時茫然として手を下だす所を知らず、其の演説の反響國民の耳朶に達してより、佛帝の威信傾き遂に他年敗滅の兆を成したりと、歐洲にては法廷演説も議院演説と同視せられて、其の雄辯者は往々社會の稱揚を博取せり

○又別に大道演説なるものあり、此の演説は普通演説と赴きを異にし頗る困難なるものにて、英國にてはチルソンの銅像の在る廣場や、或はハイドパーク等に通例行はるゝとなるが、百姓一揆的の演説なれども、議院會場の演説家にては殆んど能くし難きものなり、而して其の演説法たるや、大聲に一句々々を切り段落を立て、談話すべきものにて、文字無き俗人の群衆を動かすを以て目的と爲す、グラットストンは議院教會等あらゆる

方面の演説に成功したる雄辯者なれども、大道演説のみは如何あらんとは、彼のボルガリヤ虐殺事件に對する、倫敦北郊の大集會演説者として一般人民に危ぶまれたる所なるも、グ氏が大會當日三萬人の大衆に對して満足なる感動を與へたりしは、人々の實に感歎する所なりしと云ふ、蓋しグ氏は天才の雄辯者にして、之れに加ふるに讀書勉學を以てし、博覽強記材料を蓄ふると豊に、例證を引くに富みしを以て、總べての方面に於て皆成功せざるとなかりしなり

○演説家としては身軀の健康甚だ必要なり、身軀に病氣あれば十分に演説出來ざるものにて、特に肺部の疾患を然りと爲す、故に身軀健康にして意氣充滿すれば演説も亦隨て活氣あり、人を感動せしむるとを得べし

○此の外演説家として最も必要なるは自信と熱誠なり、其の演説する事に付いて、確然たる自信あり、且つ熱誠なる精神充滿せずんば決して人を動かす能はず、故に辯士たるものは演説に先んじて精神の修養を根底とせざるべからず、虚偽修飾の人は精神必らず餒ゆる所あれば、到底大演説を爲す能はざるなり

○英國のジョンブライトは天然の好音にて、其の音聲鏗々として樂聲の如く、聽者をして恍然感に堪えざらしむ、而して彼れは多く學者的の言語を使用せず、アングロサクソン固有の語を用ゐて多くの人を感動せしめたるが、其の自信の強固なると、熱誠の熾烈なりしは、實に彼れが演説の根底たりしなり、其の他米國のリンコルン、佛國のガンベッタ等皆學識に富まざりしも熱誠を主とせる演説家にして、特にガンベッタの如きは、演説

中熱情激迸して議院壇上に氣絶したるとあり、熱誠此くの如くなれば人を感動せざらんと欲するも得べけんや

○米國のウエブスターは博覽強記演説の摸範と稱せられ、英國のバークも亦材料に富み例證に饒に、共に皆學者的雄辯家として、一世に推重せられたり、之れを要するに學識と精神とは演説家に缺くべからざる資格にして、又惣べて演説家には凝固する氣質を要格と考へらる、畢竟其の自信と熱誠の然らしむる所なるべし、英國第一流の雄辯家ロイドチャタムは演説を修練するに専ら俳優的風采を摸倣したりと傳へらるしも、彼れは元來狂氣染みたる熱誠家にて、且つ甚だ自信深き人物なれば、其の演説の人を感動せしは態度風采よりか、寧ろ熱心が其の要素たりしならん

○又英國のシエリダンはワレンヘスチングス印度虐政彈劾事件に關係して雄辯の名を揚げたる一人にて、彼れは才藻豊富言辭巧妙常に準備なき名演説を爲す人と稱せられしが、彼れが死後其の手函の内より幾通の演説草稿を發見せしかば、シエリダンの如き天才の雄辯家も亦此くの如く苦心用意する所あるかと、死後世上に喧傳せられたり

○フォックスの演説は新思想に富み人を感動せしむる雄辯なりしも、之れを文章に寫せば演説の如く人を感動せしむる能はざりし、又之れに反してバークの演説は人を感動せしむる力フォックスの如くならず、而して其の議院に於ける威力も亦晩年頗る失墜したれども、其の演説たるや長大精密宛も妙文を誦するが如く、筆記を讀むもの皆感歎せざるなかりし、以て兩人の長

短は文と語の得失に在るを知るべし

○日本の言語は支那の文章より來たれるもの多きを以て、演説家たらんものは多少支那の文章に通ぜざるべからず、而して又之れと同時に歐米の新學問に通ずるの必要なるは言を待たざる所なり

○演説には成るべく平易なる語を用ゐ、多數の聽者に論旨を理解せしむるを以て目的とせざるべからず、總數千人あれば先づ八百人位の聽者に論旨を理解せしむるを以て演説の程度と考ふるなり

○島田君の談話中討論は平素材料の用意周到なるもの勝利を制すべしと云ひ、演説の態度風采を教ゆるは自ら好む所にあらずと云ひ、又輿論政治の行はるゝ國にあらざれば演説發達せずと

て、英佛米諸國に演說の大家輩出せるも、獨逸は之れなき所以を説く等、尙記すべきもの少からずと雖も、紙上限りあるを以て之れを畧す(談話に據る)

尾崎行雄君

○予は平素演說を爲すとを好まず、成るべくは他人に譲りて、自ら演說することを避くるを例とせり、たゞ已むを得ざる場合に限りてのみ演說を爲せども、其の度毎にソットする感じせらるゝなり

○予は元來演說に拙劣なる方にて、往年地方遊說を爲せし時は、聽衆より愚弄せらるゝを例とし、喝采せらるゝ如きとは殆んど

なかりし、予が演說に於いて名聲の聞えしは、議會開設後にて、議會に於ける演說の反響が地方に聞えて後は、地方遊說も従前より歓迎せらるゝに至りたり、惟ふに之れ地位の進歩より來たる結果ならんが、予には公衆演說より、寧ろ議會演說の方が適せるやに思はる

○予は演說に就いて、初めより多く苦心修練を爲したる事なし、故に演說に關する經驗の語るべきもの存せず、蓋し予の演說は覺えず知らずの間に發達し來たりしを以て、今日に於いても予は演說家を以て自任せず、世人が予を推して演說家と爲すを見て寧ろ自ら怪む位なり

○予は演說を爲すに未だ會て草稿を作らず、蓋し草稿を要する程重要なる演說を爲さざるが故なり、尤も財政等に關する計數

は此の例外にて、一度は草稿を用ゆる程の演説を爲して見たきものなり

○予は演説を爲す時とても別段に研究を爲さず、大抵平素考え居る事を演説するが常なり、故に予は演説中平素の考え以外の事を言はず、言ふ所は必らず思考を経たるものなり

○要するに予の演説に對する覺悟は、簡潔明瞭を旨とし、必要以外一句も駄辯を弄せざるに在り、此の外秘訣として語るべきものなし

○予は明治十六七年頃、歐米の演説法を翻譯して發行せしめたが、恐らく之れ我國演説に關する著書の嚆矢なるべし（談話に據る）

加藤高明君

○日本人の演説は、雄辯滔々として聽者を驚かすものも、語の末尾にゴザリマスとか、デアリマスとかを附するを以て、大に演説の語勢を弱め去らるゝ感あり、歐米の如く、中間に動詞を用ゐて末尾を振揚せしむるの趣向無きは遺憾なり、之れ蓋し辯士の罪にあらず、言葉の缺點ならん、且其のマスと云ひ、マセヌと云ふも、語勢弱きが爲め往々誤聞を來たすの恐れ無きにあらざれば注意すべきなり

○西洋のユーマーとか、ウキットの如き、一寸人を面白がらせ上品に軽く人を笑はすの談話は、我邦には甚だ乏しきように思はる、我邦の辯士が人を笑はすのは、往々皮肉に流れ滑稽に

失して卑陋の感を免れず、是れも亦言葉の乏しきが故ならんと思はる

○チエンバレーンや、故グラットストン杯は、演說中一寸聽衆の氣を抜きて笑はすと巧妙なり、此くの如く演說中に折々聽衆を休ますこと必要なれども、日本にては未だ多く行はれざるに似たり

○社會上の事に就いての演說、設令ば學校の卒業式、又は種々の儀式に於ける我國の演說は、千篇一律孰れも生徒を戒むるとか、成功を祝する位にて、之れを活版に附して通用するも可なれど、英國杯にては種々様々趣向を變えて面白く演說するを以て、之れを聽くもの頗る趣味あるを感ず

○日本では食事後にも、慷慨なる六カシイ演說を爲せども、西

洋にては食事後の演說は、惣べて六カシキ事を言はざるを通例とせり

○外國語では同一の事を種々に言現はす詞あり、文章に於ても種々に組立て得らるれども、日本語にては殆んど一二種に過ぎず、其の變化乏しき所は、亦日本詞固有の缺點なりと云はざるべからず

○音聲容貌等は大に演說を助けるものにして、グラットストンは有名なる演說家にて、精密なる文章を以て演說の草稿を作り、是れに據て演說を爲すに、其の音聲と云ひ、容貌と云ひ、又經歷地位の卓出せるが故、聽衆は非常に感動し恍然として夢中に入るなり、然も翌日に至りて、其の演說を新聞紙上の筆記に就いて讀めば、全然別物の如く殆んど何等の感を起さず、氏の演

説は錯綜迂曲抑揚甚だ巧妙なるを以て、句毎に云へば前後矛盾の嫌ひ多きに似たれども、全局の上より觀れば殆んど容喙の餘地なきが如し

○要するに演説は、學識と地位を主とし、辯舌之れに伴はざるべからず（談話に據る）

高田苗早君

○演説に臨んで先づ心得ざるべからざるは聽衆を看取する是なり、此くの如き聽衆に對しては此の位の演説が適度なるべしと見込みを立て、形容又は譬喩等も聽衆の程度を計りて取捨せざるべからず、尤も演説の大體は此くの如く咄嗟の間に變更し

得らるべきものにあらざれば、聽衆の程度を計りて取捨按排するは無論其の枝葉の事なりと知るべし、所謂人を見て法を説く運用の妙は其の人に存するなり

○演説を爲すには最初の四五分間に聽衆の人氣を支配せざるべからず、是れ必らずしも其の人の徳望地位を俟て然るにあらず、蓋し聽衆を支配する方法としては先づ第一に音聲の明朗なるを必要とし、第二に言語の明晰なるを必要とし、第三に人を動かすの警句を必要とするなり、此の三者を具備して登壇劈頭先づ聽衆の人氣を支配すれば、其の後は坦々たる街路に馬を驅るが如く縦横自在に意見を演ぶるを得べし、然も結局警句頓智のみに憑りて演説を爲さんと欲せば遂に聽衆の心を失ふに至るべし、是れ即ち學識材料の蘊蓄を必要とし、又演説の結構組織に

力を致さざるべからざる所以なり、彼の演説遺ひとして世人に蔑視せらるゝものは、畢竟枝葉の技術に馳せて本領を喪失し居るが爲めのみ

○西洋の政治家の演説は皆文學的趣味に富み津津々たる妙味あり、是れ畢竟バイブル若くは希臘拉典等の古典を引き、或はセイクスピヤ等の名語妙句を引用するが爲めにして、日本にては支那の詞を引くものあれども其の以外は自由に引用すべきの語少きを以て、西洋の演説に比すれば甚だ趣味の乏しきを感じずんばならず、西洋現今の政治家中ローズベリー又チエンペリン等の演説は、昔時のバーク、シエリダン、チャタム等の演説に比すれば皆事務的にして大仰ならざれども、尙我邦の政治家の演説に比すれば遙に文學的趣味に富み居れり

○古典を引き古語を用ゆるは畢竟其の論旨を聴衆に判かり易からしめんが爲めなれば、聴衆の十分知抜いたる言を引くは却て其の侮蔑を招くの恐れあり、然も徒らに自家の學識を衒ふて聴衆に誇らんは甚だ賤むべきとなれば、辯士たるもの慎んで此の陋態を避けざるべからず、要するに聴衆の程度を觀て平易に失せず高遠に過ぎず、適宜に古典を引き譬諭を用ゐて聴衆の耳目を啓發するは辯士の務むべき所なり

○日本の演説家は西洋の演説家に比して即席演説の技術は寧ろ發達し居れるが如し、西洋の演説家には草稿を作て準備する事多く行はれ、特に學者に於いて其の然るを見る、政治家の演説も亦多くは此の草稿準備を用ゐざるなし、然も日本の演説家は多くは草稿準備に力を致たすものなし、是れ蓋し西洋は言文一

致にて草稿其の儘に演説たるべきも、日本は言文二途にて面倒を感ずると多きが故ならんか、故に日本人の演説は大躰豫め之れを作り置き其の枝葉は當意即妙に遣て可なり、蓋し言詞通俗に過ぐれば自ら野卑となりて品位乏しく、文章に過ぐれば自ら濫硬となりて聴衆を感動せしむると薄し、故に演題と場合ひとにより言文の配合自ら其の宜しきを得んとは、自ら辯士の機略に存ずるものと知るべし

○西洋の演説大家中演説を聴く時と跡で文章にて讀む時と非常に感動の差違あるものあり、彼の英國のバークの演説筆記は今日に至るも尚ほ英文の標本として珍重せらるゝ所なれども、バークの演説中には議員等往々議場を退出して同情を表せざるものありし、又フォックスの演説は文章として讀めばバークに

及ばざるも其の演説の人を感動せしむるとは實に非常なりし

○演説と討論とは其の性質異なるものにして、演説に長じたるものは議會内より議會外に於て多く成功を收めらるゝが如く、議會の成功は討論辯難に長じたる人に多し、予は公衆演説には比較的的成功したりと思ふ場合ひなきにあらざれども、議會に於ては殆んど成功せりと思ふものあらず、蓋し予の演説は講義的にして常に説明に傾き討論に拙なり、併しながら之れ一昧人の性質にも因るならんか

○最も高尚なる感化力ある大演説家は日本には出でざるもの、如し、今日の演説家中自分の意見を演べ若くは他の意見を論駁するに於て大技倆あるものは何人ぞや、恐らく今後と雖も拔群なる大演説家は日本に出でざるべし、并は蓋し日本の言辭が西

洋の如く演説に適せざればなり、特に今日の如く議會の言論萎微して長演説を厭忌するの風増長するに於ては、尙更ら大演説家は出てざる筈なり、惜むべきこと云ふべし（談話に據る）

加藤政之助君

○予は明治八年頃福澤翁の門に入り、専ら英學を修めたるが、當時福澤翁は演説館を慶應義塾の構内に建設し、毎月數回演説會を開き、教員生徒に命じて演説の練習を爲さしめたりしが、明治十年の頃なりと覺ゆ、予は一日先生の命に因りて、演説せしに、心熱し目眩して前面聽衆の幾許人あるかを識別する能はず、僅に二十分間勇氣を鼓して演説を了へ降壇せしが、流汗滿身を濕ほし、心臓の動悸脈々として尙止まざりし、然も是れより後

腹稿ある毎に必らず演説せしに、久しからずして翁より、演説館の幹事を命ぜらるゝに至れり

○此の間の經驗に依るに、演説の度數を重ねるに従ひて、自分の態度も自ら沈着し、聽衆の人品種類一々眼中に映じ、主旨一貫理義明白、苟も腹稿だに熟すれば、辯舌相應自己の所信を聽衆の腦裏に注入するを得べし、然も腹稿熟せざる時は、辯舌の自由なるにも拘はらず、往々聽衆をして耳を傾けしむる能はず、特に學術演説に於て其の然るを覺知したり

○演説に草稿を用ゆるとは、外國に於て、政治家學者間往々見る所なり、我國にても、草稿を用ゆるものと、用ゐざるものと二種あり、予は初めより腹稿に據りて、草稿を用ゐず、蓋し草

稿を用ゆれば、其の言はんと欲する所、一事一項漏さず言ひ盡すを得べしと雖も、是れが爲め抑揚頓挫の自由を妨げられ、隨て語勢を弱くし活氣を失ふの弊あるを免れず、故に一言一句を慎むべき重要な演說にあらざる限りは、寧ろ草稿を用ゐざるを可とす

○特に喧噪極まる、公開政談演說會の如きは、草稿を用ひざる方頗る便利なり、蓋し此くの如き演說會に於ては、演說の主旨の如何よりか、寧ろ聽衆の視線を我が一身に向て集中せしむるを以て必要なりとす、聽衆の視線一度我れに集まれば、其の演說にして抑揚頓挫さへあれば、喝采を博すると難きにあらず、故に政談演說會に於ては、其の論旨よりか、演說の組織と、態度に注意すると必要なりとす(寄稿に據る)

竹越與三郎君

○歐洲諸國にては、演說が文學の一部として、有力の地位を占め居れども、我邦の文學は、文章詩歌に限るが如く思はれ、演說は只政治家の意見を發表するの道具とのみ認められて居るは遺憾なり、故に予は今後我國の文學者に文章詩歌に限らず、すべて物事に理解を興へ、結果を興ふるには、演說の極めて有益なることを認識されんとを切望するなり

○議院に於ける演說に就いて、予は此くの如き希望を懷けり、即ち各黨派の代表者として議院に演說するものは、學問あり、識見あり、且品格を備へたる人物にあらずんば、演說を爲すべからずと云ふが如き、一種の程度を定めて、自然の制裁を作ら

んと之れなり、此くの如くなれば自ら議院の威信を發揚し、且演說の價値を増進せしむるを得べし

○歐洲諸國にて、演說は往昔の如く盛ならずと雖も、尙フールドレーヌ、スピーチの行はるゝあり、所謂化粧演說にて、問題を豫定し、意匠を凝らし、辭令を修飾して辯舌を闘はず、此の化粧演說あり、以て演說の價値を維持せり、願くは我邦にも亦此の事行はるゝに至たらんとを

○予は演說に就いて經驗の語るべきものなし、東京にて二十一年間に、僅々四五回の演說を爲したるに過ぎず、故に自家經驗談に代ゆるに、英國演說家の二三事蹟を以てすべし、

○英國演說の隆盛を極めたるは、ジョージ三世の時代なり、當時演說家として傑出せしはピット、フォックス、及びエドモント

パークの三人にして、ピットは高尚の性情と、邁往の氣魄に富み、其の始めて議會に演說するや、雄辯滔々人をして驚歎せしめたり、反對黨のフォックスは、大ピットの子に此の人あり以て家名を墜さずと、感喜して其の成功を祝せり、或人ピットの此の演說を評して曰く、彼れの演說は、露國の地中より掘出したる、太古時代の驚くべき骸骨の大象より偉大なりと

○エドモンドパークは文章に工みに、辯才に富み、且自由を愛し、權利を重んずる熱誠漢なり、其のワレンヘスチングの東印度に於ける、不正壓虐を議會に彈劾するや、ヘスチングスも亦之れを聽けり、初めは以て奇怪なる言を爲すものとして頓着せざりしに、中頃に至たりて論鋒痛切言々我が頂門に針せらるゝの感ありしが、終りは情理懇到惻々として毛髮動さ、己れも亦

其の同情者中の一人たるに至れりと、此くの如きは畢竟パーク天性の雄辯に依るなるべしと雖も、若し彼れに宗教を信じ、道徳を重ずる、純潔至誠の心あるにあらずんば、何を以て此に至るを得んや

○フオックスはピットの如く高尚なる品性無く、邁往の氣象なしと雖も、同情に富んで寛大に、能く其の部下を愛撫し人心を收攬す、其の自由を愛重するの念切なる、佛國革命の火の手揚かるを見て、毎日歡抃拜祈したる事實に徴するも明かなり、フオックスの心性此くの如し、故に其の演説も亦慷慨義氣に富み、同情の熱淚滂沱として双頬に下だる、聴くもの皆感激せざるなかりしと、

○是の三大家の演説に據りて、吾人は左の如く論結せざるを得

ず、曰く演説は單に辯舌を弄する一種の技術にあらず、精神感情識見學問等の、化學的に結晶せるものなりと、

○演説には法廷演説、教會演説、社會演説、食卓演説、議院演説、議院外演説等種々の區別あり、之れを混一して學修せんとは困難なり、何となれば各皆其の特性あり、教會演説の雄辯者必らずしも議院の雄辯家たらず、愛爾蘭獨立黨の首領フーゴンネルは、野外演説に於て比類無き成功者なりしも、議院に入りては雄辯家の名を博する能はざりし、又タウンセントは野外演説に拙なりしも、議會に於ては只一回の演説にて、國務大臣の椅子を獲得したり、演説を學修せんとするものは、此の區別に留意せざるべからず(談話に據る)

演説には前夜の睡眠不足、若くは酒の飲過ぎ、或は房事過度等尤も害あり、辯士たるもの注意せざるべからず

演説は北向きの演説場最も辯士に可なり、南向西向等は、辯士の顔面に日光反照するの恐れあるを以て、辯士の不利云ふべからず、東京にては、錦輝館最も演説場に適す

多数辯士の演説場にては、簡短に要領を大聲に演べ去るを得策とす、綿密なる長演説は、聴衆の厭倦を招くの恐れあり（談話に據る）

奥野市次郎君

○予は演説を爲すに就いて首尾一貫せる草稿を作らず、たゞ其の要點を個條書にして記憶に便するのみ、尤も責任を重ずべき演説は豫め其の組織を立て、概要を記稿するとあれども是れとて異例に屬するなり

○予が演説を爲し始めたる動機は、明治十二年頃京都府中學校教師となり學生に教授したる時に在り、當時は専ら教科書に就いて講釋を爲し、威壓的に生徒に説き聞かせたるを以て、自然其の習慣が後來に遺存し、草稿を作らず不謹慎なる演説を爲すに至れるなり

○演説の材料は隨時書籍に就いて之れを調査し、徒らに辯術に頼るとのみを爲さず、成るべく趣味ある新材料を蒐集し來たりて聴衆を感動せしめざるべからず、尤も時事問題に就いては必

らずしも然らざるなり

○演説を爲すものは多少修辭の上に注意せざるべからず、其の言語莊嚴に過ぐれば感動薄かるべく、卑陋に流るれば威嚴を失して聴衆の侮蔑を招くに至るべし、此の間自然に其の調和を得て演説の品位を維持せんとは辯士の最も注意を要すべき所なり

○演説者の態度に就いて予は殊更に學習の必要を感せず、元來演説は自分の感情思想を言表はすを以て本旨とすべきものに於て、感情思想内に充滿し全力を注いで之れを言表はすに於ては、自ら手足の精神と相感應して適宜の作動を爲すべき道理なれば、別に形容態度を以て修飾するの必要を認めず

○演説の妨害にも二様の別あるべし、一は迫害的の妨害にして二は批評的の妨害なり、迫害的の妨害に對しては到底防禦し能

ふものにあらず、予は從來此の種の妨害に逢ひて危害の身に迫るまで抵抗を試みたれども、喧囂の極聴衆其の言ふ所を聴取する能はざるに至ては復た如何ともすべからず

○然も程度の低き妨害即ち批評を以てする妨害に對しては十分之れに當たるを得べしと信ず、蓋し批評的妨害は是れが爲め却て聴衆の注意を喚起し、演説の主旨をして一層深く聴衆の腦中に入らしむるなり、且つ又批評者の言は往々演説者を鼓舞刺撃して適度の勇氣を發作せしめ、演説をして一段活氣を生ぜしむると少からず

○非常なる妨害に對しては非常なる根氣を以て應戰するの外なかるべし、妨害の間斷ある毎に其の演説を進行して屈撓すると無くんば、妨害者も亦往々根氣負けして靜穩に歸するとあり、

妨害如何に劇しきも多數聽衆中には必らず辯士に同情を表すものあるを以て、屈せず撓まず應戦すると肝要なり

○然も又妨害者の批評に對して一々應答するは、自家演說の本旨を喪失し、枝葉傍徑に馳せ去るの恐れあれば、辯士たるものは妨害者の批評に對しては軽く之れを受流し、時に奇兵を放て側面より其の不意を襲ひ務めて正面の應戦を避くるを可とす

○演說は聽衆によりて無論其の趣きを異にせざるべからず、地方の見聞の狭き聽衆に對しては、高尚なる理論を用ゐるとは成るべく之れを避けて、専ら實際問題に就いて演說するを可とす、然も東京などの聽衆特に學生の多く混入せる聽衆に對しては、少くも理論より割出したる批評的判斷を骨子としたる演說を爲さざるべからず、然らすんば往々冷評を被むり侮蔑を招くに至るべし

○演說は言葉の緩急に注意せざるべからず、初めは靜に緩かに演說し漸々語調を強くして、段落毎に此の筆法を用ゆれば自ら演說に情致を生ずべし、初中終大聲劇語を以て打通さんとは何人も殆んど能はざる所なるべし

○議會に於ける演說と、公衆會場に於ける演說とは自ら趣向を別にせざるべからざるに似たり、予は府縣會議員として數々之れを實驗せしとありしも、衆議院に於ては未だ實驗するの機會を得ず、議會演說家として尾崎氏の如きは蓋し上乘ならんか

○君は明治十二年より引續きて今三十六年に至る二十五年間に凡そ一千回以上の演說を爲し居れるならんと語られたり(談話に據る)

福井三郎君

○演説には人物を以てすると、意見を以てすると、辯術を以てするの三種あり、人物と意見とは敢て當らずと雖も、辯術に至ては聊か自ら頼む所ありと、滔々として其の經驗を談ずる所頗る聴くべし、今左に其の一二を掲ぐ

○辯術の妙所は機智縦横混々として盡きざるに在り、會場の情勢を觀、聴衆の意嚮を察して、巧みに活機を擒縱し、聴衆を舌頭に翻弄して、覺えず知らずの間に我れと同化せしめざるべからず、彼の豫め腹案を作り草稿に依りて演説を爲さんとするものは一旦會場の形勢豫期に反し、妨害百出喧騒制すべからざるに至れば、呆然言ふ所を知らず、腹案も草稿も遂に徒勞に歸して、已まんのみ、

て、已まんのみ、

○然も平素機智縦横の辯術を修練せるものは、此の際に在ても綽然餘裕あり、巧みに難關を切抜け得らるべし、

○予は演壇に登れば、必らず先づ聴衆の種類に注意し其の多數者は何種の人に屬し、少數者は又何種の人なるやを鑑別し、然る後先づ多數者を對手として演説を始め次に其の餘派を少數者に注ぎ以て双方を満足せしむるを例とせり、

○又時として聴衆の意嚮不明にして、如何なる工合ひに演説して可なるや判知に苦む場合は、試みに先づ兩端の説を聴衆の頭上に投じて意嚮を探ぐるなり、此くの如くせば聴衆の意嚮忽ち分明すべきを以て、直に其の機頭に乗じて、我が意見を説進むなり、此の筆法を以て演壇に登れば大抵成功せざるとなし

○聽衆若し餘りに實直に窮屈らしく意氣を凝らして聽聞せば、是れに滑稽的戯言を投じて先づ失笑せしめ、其の意氣少く緩和するを俟て乃ち其の意見を説進むなり、此くの如き局面展開の秘訣知らざるべからず

○予往年地方遊說中徳島縣に於いて、反對者の妨害甚しきに遭ひ、同行辯士皆喧噪に妨げられて失敗に終りしが、予は登壇否や聽衆に向て、先づ其の黨事に熱心なるを稱揚し、此くの如き熱心者我黨中に幾人ありや實に慚愧の至りなりと叫破せしに、反對聽衆等俄に沈靜して耳を傾くるに至りし所を、忽ち大聲にて、爾り此の如く地方に熱心なる多數の黨員を有せる自由黨が中央に在て萎微振はざる所以のものは何故ぞやと喝破せしに、彼等度を失ふて狼狽せし所を例の如くドシ〜自説を説進めやがて無

事に降壇したり、活機擒縱の術知らざるべからず(談話に據る)

○ 黒岩周六君

○予は去る明治二十三年遠州中泉に於ける、波多野承五郎氏の選舉應援演說會に臨みて、非常なる妨害を被むりし以來、演說家としては音聲の修養最も必要なるを感知せり、蓋し音聲の強弱は天賦に出づるものなれば、特別修養の方法あれば兎も角、否らずんば音聲の乏しきものは、到底演說家として成功の見込みなしと云はざるべからず

○予は昨今音聲修養の工夫中なるが、西洋の唱歌は、抑揚緩急の節序正しきを以て、之れを學修せば、音聲の修養に裨益あら

んかと思考せり

○西洋の雄辯法を讀むに、音聲の修養に就いては頗る力を致せるを見る、其の演說會場の廣濶にして、目先き遠きものに在ては、成るべく顔を上げて演說すべしと説けるが如き、音聲の使用に注意すると深し

○予は演說中膽氣の据はるを以て、最も必要なりと思考す、演壇に登て平素人と談話するが如き心持ちとならば、其の演說も亦頗る自由なるべきに、未だ此の境遇に至る能はざるは遺憾なり(談話に據る)

○木下尙江君

○窃に思へらく、演說また畢竟人格の發露に外ならずと、故に演壇に立つの第一用意は辯舌の巧拙如何に非ずして、心念の正邪如何に在り、希臘羅馬より以て近代に至る、雄辯一世に轟けるの名士乏しからず、然れ共余は曾て彼等に往くをなさずして常に聖書を繕て耶蘇に學べり、

○人若し聖書の他、汝尙は雄辯の摸範ありやと問ふものあらんか、余の淺學寡聞なる、敢て論語に據りて孔丘を擧げんとす、世間往々孟軻の辯を稱す、蓋し孟軻は才辯に富めり、彼の才辯は遙に彼の人格を凌げり、是れ摸範としては餘りに吾人に近きに失す

○雄辯は宛かも電光の如く烟火の如し、忽焉として閃き、忽焉として滅す、要は對手の腦裡に忘るべからざるの印象を深刻す

んかと思考せり

○西洋の雄辯法を讀むに、音聲の修養に就いては頗る力を致せるを見る、其の演說會場の廣濶にして、目先き遠きものに在ては、成るべく顔を上げて演說すべしと説けるが如き、音聲の使用に注意すると深し

○予は演說中膽氣の据はるを以て、最も必要なりと思考す、演壇に登て平素人と談話するが如き心持ちとならば、其の演說も亦頗る自由なるべきに、未だ此の境遇に至る能はざるは遺憾なり(談話に據る)

木下尙江君

○窃に思へらく、演說また畢竟人格の發露に外ならずと、故に演壇に立つの第一用意は辯舌の巧拙如何に非ずして、心念の正邪如何に在り、希臘羅馬より以て近代に至る、雄辯一世に轟けるの名士乏しからず、然れ共余は曾て彼等に往くとなさずして常に聖書を繙て耶蘇に學べり、

○人若し聖書の他、汝尙は雄辯の摸範ありやと問ふものあらんか、余の淺學寡聞なる、敢て論語に據りて孔丘を擧げんとす、世間往々孟軻の辯を稱す、蓋し孟軻は才辯に富めり、彼の才辯は遙に彼の人格を凌げり、是れ摸範としては餘りに吾人に近きに失す

○雄辯は宛かも電光の如く烟火の如し、忽焉として閃き、忽焉として滅す、要は對手の腦裡に忘るべからざるの印象を深刻す

るに在り、此の印象のヤガて描出せられしもの、是れ論語にあらずや、福音書にあらずや、故に隻語の上に孔丘活き、半句の間に基督躍る、彼の口舌を以て意識表露の唯一機關と誤解し、冗長なる速記録に整然死語を遺すべく苦心するが如きは、豈に管に雄辯の敵のみならんや、眞に造化の妙機を無視するものなりと云ふべし、

○余曾て故グラッドストーン翁の雄辯を稱讚するものを聴けり、曰く彼の豫算を説明する宛然音樂の觀あり、乾燥なる數字も彼の唇頭を洩れ來れば、直に化して爛熳の美花となると、而して數字の説明を以て演說中の最難事件となすと、殆ど萬人の定論なるが如し、余大に惑なきと能はず、

○試に思へ、世に規律整然として明瞭疑なきもの數字の如きあ

らんや、若し此の簡單明了なる計數にさへ美的説明を下たすと能はずんば、況して他の紛擾錯雜なる事變關係をや、若し我れ到底計數に向て美的説明を與ふると能はずと云ふ人あらば、余は敢て忠告す『寧ろ、君、演說を斷念せよ』、(論稿要領)

野間五造君

○演說の方法に就て

○我國に演說法無し 演說と言へば誰れでも眞似の出来る様に思はるゝけれど、サテ實際眞面目に演說と云ふを研究して見よふと思へば中々骨の折れる仕事で、一種六ヶ敷「アーツ」である、歐米では「アリストートル」以來發達したる「レトリック」と

して研究して居るが、我邦では文章を練磨する上に於てこそ美辭法を用ゆるけれど、演説を研究する爲には用ひて居らぬ様である、故に我邦では演説法など研究して演壇に立つ人は誠に少なく、言はゞ皆々器用次第に出鱈目を喋べり立てると言ふに過ぎないのである、世に雄辯家として稱へらるゝ人達の内でも演説法に合ふた人は先づ無いと言つてよかるふと思はれる、

○我國の演説定義 それも其筈で今日迄世人が演説と言へる者に下したる定義は、即ち自分の意志さへ聴衆に通じさへすればそれで善いと云ふ考へらしく思はれる、鐵棒で破鐘をたゝいた音響でも、吹さすさぶ簫笛の音色でも同一に考へて居るのであると思ふ、音響が人の耳朵にさへ觸るれば其れて良いと心得て居る様では演説の事は話せぬ

○演説と美術の觀念 今迄の所では誰れの考へにも毫も美と云ふ觀念を演説と云ふ者の内へは算へて居らぬ様に思はれる、是れは大變な間違で演説と云ふ者も一種の美術で、且つ人生に必要な武器であると云ふ事を知らねばならぬ、

○歐米の演説教科 我邦の學校でも追々演説の研究が始まるであらふが、今では何れの學校でも教科として演説法を研究はして居らぬ、米國などでは演説法の研究は随分八釜敷科業で宗教學校では學科の一に數へてあるそふです、現に吾輩が見た所でも或る宗教學校では演説練習室が在つて、其部屋は三面の壁が鏡を以て張りつめられ、中央に演壇を設け辯士の臍度を練習するに供へて中々にコツた者です

○演説奨勵の結果 我邦の學校でも學科外に演説を奨勵した所

二三在る様であつて、京都の同志社、東京の慶應義塾、早稻田の専門學校などでは頗る盛んにやつた事もあつたです、其結果今日雄辯家と言はるゝ人は多くは此三學校から出て居る様です、并は兎も角も現在我邦で演説者と言はるゝ人達は、前に述べたるが如く自分の意志さへ他人に通ずれば善いと云ふのを標準として居るから演説振りときては丸で無茶苦茶です、數百千の聴衆を控へて居る公開演説の口調も、僅か十數人の客に圍まれてやる「テーブル、スピーチ」と同一口調でやつてのけるのですから、挨拶だか演説だか判らずにしまふのが多い様です

○言葉使ひの注意 又今の辯士達は言葉使ひに注意せぬから、折角の演説が聴衆に判らずにしまふのがあつたです、田舎の百姓を聴衆として居る場合に、無暗に外國語やら科學上の言葉を

を交へ、其上統計上の數字を述べ立てたとして其れが判かる者ではなひ、歐米でも特殊の場合を除いて「ラテン」語や詩篇を交へる事は禁物としてあるのである、

○國訛りに注意すべし 我邦で殊に注意を要する者は國訛りである、吾輩が演説の度毎に苦心するのは是れである、如何程名演説でも大阪辯や奥州訛りでは聴衆の頤を解く迄であつて、折角の演説の主旨を貫徹せしむる事はむつかしひ、由來高知縣と長野縣には雄辯家を多く出すと云ふも、此國訛りが割合に少なく、又た多少訛りがあるにしても其訛りは聴き善ひ訛りであつて、演説の邪魔にならぬからであるふと想はれる、初心の演説者は此義に就て充分の注意を拂はねばならぬ

○辯士の躰度 今の辯士達程躰度に注意せぬ者は無ひ、一ト際

の雄辯者と言はるゝ人でも其人の眼使ひ、足の踏み方、手の振り様などは無茶苦茶である、其れ故折角の演説が題無しになつてしまふ事がある、試に思へ、從令辯士が口頭泡を飛して悲憤の演説をして居ればとて、其人の眸腫が下たに向き、足に力が入らず、手は兩側に垂下して居つたとしたならば、其悲憤を聴衆が感ずるであらふかどふか、恐らくは滑稽に流れるであらふ、全體口調と姿勢は並行せねばならぬ者であつて、聴衆の活氣を惹起さんとする時は、右の手を上を挙げ左足を後に引くと云ふが如き、又は聴衆に哀を訴ふる時は眼を閉ぢ兩掌を重ねて直立すると言ふが如き、皆々法則の在る者にて、此姿勢と云ふ事が演説者に取りて一番困難な事である、我邦今頃の辯士は簡様な事には一寸ともお構ひはなひ様です、

○演説者と草稿 次に大切なる事は演説草稿です、其草稿に注意をする人は甚だ少けなひ様である、從て演説が無責任に流れて居るのです、全體演説は其れ自ら一文章となつて居らねばならぬ筈で、或人は我邦では演説と文章は別だと言ひますが、吾輩の言ふ文章は直に速記録を取りて言ふのではなひです、演説其れ自身の草稿を言ふのである、今日迄幾百千人の名士が演説をして居るけれども、後世にまで残りそふな大演説はトント見受けなひよふです、誠に残念なことです、是れと言ふも演説者が草稿に重きを措かぬからであつて草稿さへ注意して物するに於ては随分大文章として耻しからぬ者が出来たのであると思ひます、或人の如きは草稿を携へて演壇に現れるのを耻辱の様に思ふて居るのもあるよふです、其れ故演説が總て討論流となり

其場限りの者となつてしまふのです、大演説の現れぬのも無理はなひ、兼て聞く彼の「ベイコンスフィールド」卿は議會演説の前其草稿は數回改削され、又數回某海岸に於て演習されたと云ふ事である、又た「グラドストーン」氏の演説は其草稿を認むるに數週間を要したと云ふ事である、是れ程の注意と、是れ程の練習に依て、始めて大演説大文章と云ふ者が出来るのであつて、我邦の様に即席料理では到底大演説は望めぬと思ひます

○演説の種類

○歐米の演説類別 歐米では演説を種々に類別して居る假令は「ラトトリカル、エロクエンス」の内へは落語や人情話の類を一括せしめ、又た「アドボケート、エロクエンス」の内には法廷辯論や懺悔提唱の如き者を組み込み學術的に類別して在るが、我

邦では左様に厳格な區別は無く、ザツト數へ立つれば左の五種類位であらふ第一學術宗教演説、第二軍談落語等の世話的演説、第三講師口授「レクチャー」、第四法廷辯論、第五政治演説と言つたような者であるふ、

○法律上學術政談の區別 然し我邦では法律上演説の區別をした者がある、何であるかと言へば昔時の集會條例から流出した學術演説と政談演説の區別である、之れほど可笑しな譯けのわからぬ者は無ひ、何か學術演説で、何か政談演説かと問ふたならば、恐らく誰人も判然と答へる者は無いのであるふと思われ、或者は學術演説とは過去及將來の事實を述ぶるを言ひ、政談演説とは現在の政事を論議するを言ふと云ふ定義を下したるもあつたが、吾輩は斯様に解釋をして居る、即ち現在の政府を

攻撃する者を政談演説と云ひ、又假令政治を論ずるとても時の政府に反對せざる者を學術演説と名づくこと、先づ箇様な次第で、結局此の區別は臨監督官の手心一つである、之れ程可笑な者はあるまい

○演説は政談のみならず 弁は兎も角現今我邦で雄辯家とか能辯家とか指さるゝ者は、必ず政談演説に限りて居る様に思はれます、誠に窮屈千萬な次第である、其れ故演説者の演説振りが固た苦るしくなつて來て、肩を聳かし聲を勵さねば何か物足らぬ様な感が起り、割つて碎いて話すといふ事は今の辯士には不可能の事です、又涙を流して悲惨の狀を訴へると云ふが如き形容も不得手であります、從來の經驗から言へば各演説者が主眼とする所は、人を怒らせ、人を笑はせ、人に感心して貰ふと云ふ

より外に需める所は無ひ様子であります、人を泣かすと云ふ事には骨折りに居らぬ様子であります、屢々礮毒演説を聞た事もあります、矢張り此點は全く欠けて居ります、却て故三遊亭圓朝をして多少素養あらしめば此缺點を補ふてあるふと考へられます

○辯士の好尚 我邦の辯士が學ばんとして居る所は、彼の「エトマンド、ボルグ」が「ヘスチング」を彈劾したる如き、乃至「フーコンテル」や「ハーネル」が愛蘭土問題に就て政府を攻撃した演説振りを慕ふて居るらしい、彼の「ヘーター」が泣いて「セルサレム」の慘狀を述べ歐洲大陸に十字軍を喚起したるが如き、近くは又「ガンベッタ」が巴里に於ける婦幼の悲惨を説て義軍を四方より招いた様な演説に熱心する者は少なひ様子であります、

今後演說者として世に立たんとする者は這般の演說稽古が必要であるふと信じて居るです。

○宗教家に雄辯あり 佛教徒の内には此種の演說の上手な人があるけれども、圓朝と同様で素養乏しく題目を辿りて千篇一律にやるのだから、活氣が抜けて懦夫を立たしむるの慨が少い様です、然し佛教徒或は基督教徒の内には到底政談者流の及びも付かぬ雄辯家があります、本田島田大内市原海老名細川渥美宮川佐治阿部等の諸氏之である、此人達の口を借りて現今米國沿岸及び濠州各地に於て、我同胞が白哲人種に虐待されつゝある實情を述べて我邦の輿論を喚起せしめたならば余程効能があるうと想ふのです、之等宗教家諸氏の演說振りから稽古した辯士は、躰度及言葉使ひに於ては余程に巧者で、到底壯士上りの演

說遣ひなどが眞似も出来ぬ所であります。

○各種演說の先輩 又世話演說では高島嘉右衛門土子金四郎諸氏拔群です、「レクチュワール」では坪内雄藏和田垣謙三浮田和民諸氏を推すべく、「テーブル、スピーチ」では加藤高明都築馨六佐藤顯理諸氏が撰に入る可く、學術演說では鎌田榮吉高田早苗信夫恕軒福地源一郎諸氏が先輩です

○法廷演說者の缺點 次は法廷辯論家で在りますが、法廷辯論家中雄辯家としては鳥渡茲で擧示するのが困難であります、概して言へば法廷辯論家中には演說者として立つては不適當の人が多ひです、由來我邦の辯護士諸氏の如きは法律適用に重きを措て、無暗矢鱈に法律論に齷齪するですから、切角大事な辯論は二の町になつて居るです、全躰法律論には能辯も不能辯もい

つた者では無ひです、極言すれば覺書を提出すればソレでよいので、啞者でも勤まる役です、たゞ法廷辯論者の雄辯の必要は法官の同情を需める一點に在るのです、歐洲各國で陪審官制度の在る國では、此陪審官の同情を求めるのが一番役目です、假令民事々件でも判官の心を動かすが辯護士の最大要務です、法律論は一件書類に對する覺書提出で澤山で雄辯は必要が無ひです、然るに我邦法廷に於ける辯護士及檢察官の態度は丸て學校の討論會の様で迷惑なのは委頼人です、時に辯護士が法律論に熱中して原告の利害を忘れる事がある誠に沙汰の限りです、學校と法廷を同一視して法律原理の討論會は、遂に雄辯家たるべき法廷辯論者を驅て無味乾燥な理屈屋に走らしむるの結果になるのです、由來我法律家に雄辯者を出さざるは畢竟是等に

原因するのです、爾かのみならず我邦法廷辯論者は法律以外常識に乏しく、一も二も法律主義から割り出すを以て時々政談演説を試みる事があつても竹に木を接いだよふな趣きがあるです
 ○議員としての法律家 故に法廷辯論者が議員として立法院に立つたる場合には窮屈なる法律論か、左なくば法案の字句に拘泥した議論が多く何日でも局所論丈で終るです、折角口舌には慣れて居る商人なるに係はらず、議院内にて成功したる雄辯家は少くないです、畢竟するに我法廷辯論は法律以外の素養乏しく到底大演説大文章を試むる能力は無いです、今日迄議場内で成功したる法廷辯論家は鳩山和夫三崎龜之助磯部四郎大岡育造諸氏位に止まるです、

○政談演説家の批評

○演説家と學問の素養 政談演説家は我が邦での演説の本位に成て居ります、内閣大臣達は勿論の事、村會議員に到る迄此範圍の裡に列坐して居る次第であります、此種の演説者中には随分熟練したる者もあるには相違なけれども往々素養に於て欠けて居る者があるです、いくら言葉使ひや臆度が甘くても、學問の素養の無き演説は到底聴くに堪へる者ではありませぬ、故に吾輩は常に明言して居る、學術演説が出来る者であつて始めて政談演説が出来るのだ、學術及宗教の演説が即席にでも出来る丈の技倆がなければ、到底立派な政談演説は出来る譯けがないと言ふて居るのであります、由來我邦の政談者流は學問の素養に關係せず、たゞ辯論にのみ重きを措くが故に、數年前に於る有名な辯士も今日となつては世の廢物となり終りたる者澤山で

あります、論より證據諸君が鶯鳴社大同團結愛國公黨など當時の政論酣なりし時代の政論者を追想するに於ては思ひ中ばに過ぐるならん、現今に於ても議場などでは随分古風な演説を試みる人達もあるよふてあります、田舎の百性連中に喝采された味を思ふて愚にも付かぬ駄辯を聴かされる事は度々です、政談演説も馬場辰猪小野梓末廣重恭沼間守一の當時を憶へば餘程立派な者であつたと思はれます、今日となつては段々衰微の方でありましょふ、然し未だ議院内に於て殊に下院に於て雄辯家と稱せられる人が十數名を下らぬ様であります、

○島田三郎氏 サテ雄辯者中で世間では先づ指を第一に島田三郎氏に屈すると思ひます、島田氏の達辯は駭く程の者で、坐談に於ても天下の逸品と思はれます、氏の演説は流暢と言ふ點に

於ては殆ど欠點がない様子であります。演説振りは決して感心した者ではありません。態度に到りては上等の部類には入れる事は出来ませぬ、態度の一點では矢野文雄氏などの側には寄れませぬ、且つ演説に波瀾と申す者が一ツも無く始終一本調子でやられるから、折角緊要な場所に到りても聴衆の注意を惹く事が少くないです、たゞ氏に於て多しとする所は演説の草稿に注意せらるゝ一條である、前にも申たる如く演説は草稿が一番大切な者であるのに、餘の辯士は之れを軽々視するから演説其者が聴衆に利益を與へる事が少くない、島田氏のは兼ての素養が有りて材料の豊富なる上へに、其演説に就て特別の注意を以て草稿を認められて居るよふに想はれます、から何時の演説でも敬聽の値ひがあるです、氏の演説に就ての欠點と云ふは演説

を觀せ物の様に思ふては居られぬかと疑ふ次第である、言葉を換へて言へば、氏が演説をやるのは人に聽かせよふ、人に感心させよふと言ふが主題となり居つて、己れの述べた事を實行せんとする氣概が無いよふに想はれるです、是れ氏が演説家として成功したる割合ひに政治家として成功せざる所以であるふと思はれます

○井上角五郎氏 次ぎに世人雄辯家として井上角五郎氏を推す様であります、成程井上氏も能辯家に違ひがない、然し氏が演説家として賣り出したるは、從來の日本流で短時間の演説を以て能として居つた中に立て堂々四時間に亘る長演説をしてのけたからであつて、演説其者としては餘り感心すべき者は無ひです、猶ほ氏が演説家として成功したる所以の一は常に反對黨の中に

立て冷評熱罵の下を潜ぐりて詭辯を弄した結果であります、氏も亦た素養の上に於て余りに欠點なく、反對辯士の言葉を執へて縦横無盡に翻弄する手際或は巧妙なる譬喩を持ち出す所などは全く天稟に出づるには相違なきも、又多少「レトリック」の練磨があつた者と想はれ加藤高明氏の「テーブル、スピーチ」と其趣きを一にして居ります、然し井上氏の演説は颯風一陣の傾きがあつて、演説終れば其何を長時間喋りたるかを思ひ出す事すら困難です、恐らく本人に於ても考へ出す事は出来ぬのであるふと想はれます、又た氏の演説は無暗に敵の急所をのみ衝かんとしてあせるが故に大人の風なく演説頗る下品に流れ、折角聴衆に興奮劑を投ぜんとして却て冷笑を呼び起す事があり、又た聴衆の同情を求めんとして却て悪感を抱かす事があるです、然

し島田氏の如く一本調子ではなく抑揚頓挫自然に法に合ふて居て、何時間聽て居つても聴衆を厭かすと言ふ事はない演説です
 ○尾崎行雄氏 次ぎに人尾崎行雄氏を辯士中の辯士として推して居る、尾崎氏の演説が價值ある所以は其素養の一點にあるのです、材料の豊富なる所島田氏と伯仲の間でありて、帝國議會中一流の雄辯たるを失はずです、其態度の堂々として威風ある所は多しとするに足るのである、然し氏の演説は何時も討論風であつて常に演説が争鬭的である、言ひ換ゆれば氏の演説は軍大將として出陣の趣きがありて靜かに天下に宣言すると言ふ風がないです、故に何時の演説でも反對黨を叱咤するの姿勢を採るか、左なくば内閣大臣に喧嘩を吹き懸けると言ふが如き趣きです、其れ故彼れが如き材料豊富でありながら未だ大演説大文

章を見た事は無ひです、今日政治家演説としての「モデル」であらふと思はれるのです、

○犬養毅氏 サテ其次に辯士として世評は犬養毅氏の上に懸つて居るです、吾輩も氏を雄辯家として算へるに躊躇せぬ積りであるが、氏自身は演説家と言はるゝのを迷惑に思ふてあるふと考へられます、又進んで天晴の雄辯家となるふとは決して思ふては居らぬのです、此點は島田尾崎諸氏と異なつて居るです、自然演説にも其風が現れて居りました何時でも草稿は愚か鳥渡も注意した跡は見へぬです、勿論今日は大演説などの出来様も筈がなひです、議場などの演説は何時も簡潔を旨として要領を得たる短演説を喜ぶの風がありますから、演説振りは尾崎氏と同じく猛犬的喧嘩腰であつて、人を泣かしめ人を笑はしむると云

ふが如き技術は全く不可能です、氏は多分演説と云ふ者を左の如く了解して居ると想はれる、演説と言ふ者は總て簡潔に要領のみを言ひ顯し、其要領なる者を出來べく的早き速力を以て實行するにありと、故に氏が演説家として成功せず、政治家として成功したる所以ならんか、然し演説なる者は決して氏が思考するが如き者に非ず、或る意味に於ては一種の美術であると言ふ事を承知せねばなりません、

○大石正巳氏 次ぎに現る可き辯士は大石正巳氏である、氏の演説は犬養毅氏と全く正反對であつて、演説と云ふ者は迂餘曲折長時間に亘るべき者と心得居るらしい、其態度は頗る感服するに足るけれども、例の草稿に全く無頓着なるが故に折角の大演説も或は不得要領に終る恐れがある、然し氏の演説は何時も大

演説の形があつて優悠迫らざる所尤も多しとするに足る、たゞ其材料精撰を欠き言葉使ひ不注意であるから、折角の土佐辯も光彩少なき様に思はれる、若し氏にして少しく演説に注意を拂ふよふしたならば獨歩の雄辯家となる事が出来ると想はれる、

○大隈伯 サテ其次は先輩中の雄辯家として大隈伯を推さねばならぬ、若し伯の身に藝なる者が在りとすれば、演説なる者が第一番の藝であると言はなければならぬ、元老先輩多しと雖も伯程の雄辯家は他に需むる事は出来けぬ、否な寧ろ現在進歩黨中で第一流の雄辯家と言つて耻しくない、又た學術演説にも巧みである、たゞ其材料に如何はしき點があつて時としては早稻田大學の講師連中をして冷汗を握らしむる事が在る丈けが悪るい洒落です、其堂々たる臍度其破鐘的音聲は聽衆をして伯の名

前と共に敬聽せしむる能力がある、熟練と云ふ者は恐しい者で白鞘の大刀を携へた天保爺をして此文明の利器に對する天晴の技師として仕上げたです、演説振りは中庸を得て居つて、大演説にも小演説にも向く様です、何卒一度議場に立ち政府施政の方針を大得意に述べさせて聽て見たいです、

○伊藤侯 サテ次は誰れであるかと言へは是非伊藤侯を引き出さねばならぬ、侯も元老中では有名な達辯家であるが、然し侯の演説は常に責任の地位に立つた習慣があるから派出でなく何んとなく老人臭ひです、縦令酒氣を帯び元氣の良い時の演説でも常に右顧左盼の趣きが在て面白味が少ない、臍度も言葉使ひも賞められぬです、侯は座談に於て珍らしき辯者なるに係らず公開演説では思ふ丈の事が言へぬらしい、然し今の桂内閣の大臣

連中の如き不完全な日本語ではない、侯のは兎も角演説の形を成し時には大演説の草稿をも携へて居らるゝ事があるをふてす一度思ひ切りて政府攻撃の公開演説でもやらして見たいのです

○ 圓城寺清君

○今日の演説聴衆は五六年前の聴衆に比すれば、餘程心掛けの相違せる所あり、往年の演説は聴衆の知識幼稚なりしが爲め、論旨の如何よりは寧ろ面白ろ可笑く演説するが一般に氣受けよかりしも、今日の聴衆は極めて拙劣なる演説にあらざる限りは、何事を言ふか一應聽いて遣るべしと云が如き心掛けにて、往年の如く徒らに感情に訴へて妨害喧噪を爲すが如き事なきに至れ

り、故に辨士に於ても自然眞面白に事を研究調査して、然る後演説するの覺悟なかるべからず、

○予は從來演説の草稿を作らず、寧ろ之れを作るを力めて避けつゝあるなり、草稿を持たずに如何なる場所にても演説し得らるゝは、辨士の面目なりと信ず

○演説の態度身振り等に就いて予は研究の必要を認めず（談話に據る）

○ 幸徳傳次郎君

○予は演説も亦詩文章の如く、實地の練習を肝要なりと信ずるが故に、訥辯をも省みず、力めて屢ば演壇に立ちたるが、一回

は一回より多少の會得する所ありて、多く回数を重ねるに従ひ、徐々に困難減し來るが如く覺ゆ、學理法則等の研究は元より必要なるべきも、烏水練は物の用に立ざれば、初心の人に向つては、十冊の雄辯術の書を読むよりも一回の實地の演説を爲さんとを勧むるものなり

○彼の態度は巧妙なりと稱せらるゝも、彼の音聲は朗らかなりと贅せらるゝも、是れ演説の口目的を達せるものに非ず、演説の目的は第一に聽衆をして其意見を明白に了解せしむるに在り、第二に聽衆をして其意見に感服せしむるに在り、辯士と聽衆と其意見感情渾然として一體となり、兩者の間身振なく音聲なく喝采なく、所謂鞍上人なく鞍下馬なく、唯だ一の感動あるのみに至りて、演説の能事始めて了れりといふべし、

○第一の目的たる、明白に了解せしむるが爲めには、明白に言顯はさざる可らず、明白に言顯はすが爲めには、簡單に言顯はさざる可らず、如何に巧妙の論理なりとも、複雑にして長時間に涉れば聽衆の頭腦疲倦して其巧妙を味ふに堪へざるに至るべきなり

○簡單明白に言顯はずには、演説の組織順序に於て十分の準備工夫を費さざる可らず、予は常に之が爲めに原稿を作る、若し原稿を作るの暇なければ要點だけにも覺書を作る、彼の一時の出鱈目を並べて其頓智に誇るが如きは、聽衆に對して不親切と言はざる可らず

○予が先進大家の演説を聽聞して得たる經驗に依れば、其意見を簡單明白に了解せしむるには、適切平易なる比喻程功能多き

はなし、拙劣なる辯士が數百言を費すべき議論をも、巧妙なる演説家は平易の比喩をもて一言の下に説盡して、聴衆の頭腦に深き印象を與ふると多し

○第二の目的たる、眞に聴衆を感動せしめ、辯士と聴衆と渾然一體となるは、予は實に技術以上の事なりと信ず、即ち辯士の胸中に炎々たる至誠熱心あつて始めて能く之を致すべきのみ、至誠なき演説は如何に喝采を博するも、唯だ落語家の喝采さるゝが如きのみ、士君子の寧ろ耻づべき所なり（寄稿）

大谷誠夫君

○余は今よりして經驗と工夫を積まんとするものにして、他人

に語るべき材料を有せず、只松江市に於ける演説會は、初學者の参考と爲すに足るものあらんか

○余が山陰道を遊説したるは明治三十二年にして、其一行は楠本正隆、高田早苗、志賀重昂、桑田零丁の四君と余なりき、松江地方には公然たる同志者は僅に星野甚左衛門氏一人のみなりしも、聴衆は堂に滿ち數里を遠しとせずして來聴するものも亦尠からず、然るに星野氏が開會の旨趣を演ずるに方りて、妨害の聲四方より起り、其喧騒名狀すべからず、是に於てか心配は樂屋に起れり、曰く高田楠本志賀三君の演説を潰されなば、我黨の勢力に關する大なりと、樂屋の議は忽ち一決せり、曰く醉漢をして十分に喧噪を逞うせしめよ、喧噪の度愈激くして酔の醒むると愈々早からんと、楠本氏は乃ち余に命じて壇に上らしめ

たり、余の役目は余の演説を聞かしめんが爲めに非ずして、余の演説を蹂躪せしめんが爲めなり、此の如き有難からざる任務を帯びたる余は演壇に起ちたり、未だ一語を發せざるに早くも嘲笑と妨害とは四方に起れり、余は妨害者の最も激昂すべき反對黨の惡事のみを臚列して毒罵を極めたり、果然大激昂大妨害は加はれり、吾一語彼一語と云はんよりは、吾一語彼百語千語にして、余の聲が余の耳に入らざるに至りたれば、三千の聽衆は素より、演壇の側にある警官の耳にも妨害の聲の外何事をも入らざるに至り、警官は必死となり、妨害者を制せんとせるも喧囂は益々激しさを加へたり、余は余の任務が成効せるを私かに喜びたるも、會其もの、中止解散とならん事を恐れ、何等かの手段を以て余の演説を靜聽せしめんと欲し、妨害者の少く瘞む

機を見て一頓語を下せり、曰く「腐敗漢に告ぐべきこと只一語なり、善心に立返ると只つた一言聞かせて貰ひたいのである」と此一語は言ふまでもなく太閤記十段目を引用せるものにして、聽衆は一時に哄笑し拍手は始めて四方に起れり、是より以後五分間は頻りに拍手喝采を以て余の演説を迎へ、妨害者をして妨害を爲さしむる餘地を與へざりければ

○志賀君は意を安んじて余と代りて演壇に起ちたり、然るに何ぞ圖らん、志賀君の演説も三十分間許りは余と全様の妨害を受け、大聲を以て有名なる全君も聲を嘔すに至り、漸く後の三十分間に妨害と拍手と相半する間に演じ了れり、

○高田君は元來其聲大ならず、殊に連日の演説に頗る音聲を損し居れるを以て、此日の演説を吾も人も危めり、高田君は成算

あるかの如く莞爾として登壇し、徐ろに口を開て、當松江の藩祖松平直政公がと云へり、聴衆は意外の感に打たれ敵も味方も一齊に耳を傾けたり、高田君は語を繼て、直政公が大阪城に乘込んだ時僅かに十六歳の若武者であつたが、眞田幸村は城中より望み見て、敵ながら天晴れなる武者振りかなと感嘆して軍扇を贈與したり、此軍扇は今尚ほ松平家の寶物として保存しありと言へり、藩祖を讃められたる聴衆は味方も反對黨も一時に喝采せり、高田君は透かさず敵と雖も禮儀は此の如くなければならぬと言へり、味方は喝采し反對派は口を噤せり、此の如くにして高田君は一語の妨害をも受けず、一時間半の演説を爲せり、最後に起てる楠本翁は所謂演説者流に非ず、或は不結果に了らざるかとは余等の關心せる所なりしも、翁は先づ我黨と自由黨とは

元來兄弟の如きものである、憲政の完美を期し、政黨内閣の樹立を希望する點に於ては一致して居ると言ひて、妨害の豫防線を張り、徐ろに進歩黨の主義本領を説きて無事に此日の會を終りたり、余は此日の演説會に於て演説の工夫を多少會得する所ありき、知らず此記を読むもの亦會心する所ありやなしやを(寄稿に據る)

花井卓藏君

○予は先づ演説を分て自分本位と、他人本意の二種として説明すべし、自分本位の演説は、其の結果自分の利害得失に關すべきを以て、其の責任甚だ重きが爲め勢ひ自ら熱心を主とせざる

を得ず、

○自分本位の演説の第一に數ふべきは、議員候補者としての演説なり、之れ其の人の歴史の榮辱に關し、且つ地位の斷續、進歩の比較等、自家の得失に重大なる關係ある爲め、辯術の巧拙よりも寧ろ精神の上に重きを置かざるべからず、蓋し候補者としての演説は聽者に在ても、其の辯舌よりも政見と人物の上に注意し、是れに因りて取捨を決すべきを以て、辯士は只管演説の材料を精選し論旨を正確にし、熱誠以て聽者を動かさんと務むべし、此くの如くなれば如何なる雄辯家と戰ふと雖も敗北するとなかるべし

○自分本位の演説の第二は、議會に於ける演説之れなり、議會に於ては最も宜しく責任を重んじて熱誠に演説すべき筈なる

に、政黨領袖中には、時として政黨の爲め自家の意思を枉げて演説せざるべからざるあり、現今の議會にては、責任を重んずると、選舉演説以上のものは望んで得べからざるなり

○自分本位の演説の第三は、法廷辯論之れなり、其の勝敗は自分の榮辱に關するのみならず、委任者の利害をも其の双肩に擔ひ居るを以て、辯舌の巧拙よりも寧ろ熱誠を主とせざるべからず、蓋し法廷辯論は候補演説と相似て、之れを聽くもの辯舌の巧拙にあらず、言ふ所の道理に合ふや否やに在れば、辯舌の必要は甚だ薄きもの、如し、併し法廷辯論は候補演説に比して頗る愉快なるは、檢事との論戰あるが爲めにして、檢事との論戰は敵黨候補者と戰ふとは頗る趣きを異にし、且つ其の論戰即座に起るものなるを以て、宛も立會演説の如く、檢事の急所を突い

て勝を制せんには豫め書類調査の上に力を致さざるべからず、
 ○他人本位の演説は、自分本位の演説に比すれば辯舌の力を要
 すると最も切なり、彼の選舉應援演説の如きは、候補者を稱賛
 して代辯的に演説するものなれば、學識甚だ深からず、素養十
 分ならざるものと雖も、天然の辯才あれば應援辯士としては立
 派なるものなり、予は此の點に於て田中正造氏を天下の絶品と
 推稱せんとす

○辯舌に次いで必要なるは態度なり、風采堂々としし威重あれ
 ば、唯此の一事既に聽衆の心を動かすに足るべく、之れに加ふ
 るに雄辯を以てせば聽衆は只管感動せざるなけん、而して其の
 結果候補者に多大の利益を與ふるや言はずして明かなり、假設
 ば尾崎行雄氏と井上角五郎氏の如し、同じく雄辯家たれども、

兩人の演説に對する聽衆熱心の度異なるは、畢竟人物の如何に在
 るのみ

○次は政談演説なり、是れも亦二種に分て説明せざるべからず、
 其の一は輿論喚起の演説にして或る問題に就いて其の利害得失
 を論じ、國民の判斷を促がすべきものなれば、一人の辯士とし
 て少くも一時間以上演説に時間を費さざるべからず、故に此の
 種の演説は辯士の數四人より上に出てざるを要す、予は之れを
 名づけて政治的敎育演説と云はんとす、彼の福地源一郎等數人
 が北海道開拓使廳官有物拂下の不法を論難して天下の輿論を喚
 起したるが如き、其の成功の顯著なるものなり

○其の二は、既に勃興せる輿論に據りて、政府を攻撃するの演
 説にして、辯士の數二三十人の多きを要す、大隈條約改正攻撃

演説の如き其の成功の一例なり

○學術演説も亦二つに分つべし、一は狹義の演説にして他は廣義の演説なり、法律、經濟等専門的の演説は、學生に向てなすの外一般の人には殆んど無用なるべし、何となれば其の演説卑近に失すれば要義を失して得る所少ければなり、

○席上演説は簡短明快にして趣味あり所謂寸鐵殺人の辣辯を要すると無論なり、送別會及び政治的懇親會席上に於いて演説の冗長なるは徒らに人をして厭倦せしむるに過ぎざれば、適宜に伸縮せざるべからず、予は我邦に於いて未だ席上演説の名家なるものを見ず、故高橋健三氏の如きは、蓋し之れに近くして未だ修練の足らざるものならん(談話に據る)

内村鑑三君

○演説修練の必要なる事は、是非共日本の青年輩に知らしめたるものなり、演説のみは修練なしに出來ざるものにて、歐米諸國には、中學校位から以上演説の先生あり、莫大なる俸給を取りて生徒を教訓せり、特に大學校などにては、演説に有名なる先生あると、なきとにて入學生徒の數に大影響あり、

○演説の技術は何くに在るか、惣べての態度皆規則あり、恰も支那の詩を作るが如く、説起結論より主意の居所に至るまで、皆此の規則に支配せられざるべからず、而して此の規則たる修練を積んだる後にあらずんば會得すべからざるを以て、予は日本にも歐米の如く、演説法を教ゆるの學校起らんとを希望せず

んばあらず

○日本には、島田君の如く天才の雄辯あれども、多くは修練を経ざる雄辯なるが、同志社にて曾て雄辯法を教えたるが爲め、大分辯者を出だしたる實例あれば、教ゆれば必らず雄辯者出來る筈なり、而して其の雄辯となる方法は、固より一應原理を學習して後、各自分の流義を作出すに在るなり、

○能辯學は身體の健康を能くす、發聲十分ならず、元氣振はずんば、自然辯士の威嚴を失ふ道理なり、若し不健康にして氣力足らずんば、勢ひ酒力等を假らざるを得ず、此くの如くなれば有力なる大演説は到底出來ざるべし、

○演説に最も害あるは淫縱なり、淫縱の罪は威嚴を喪失するを以て、彼の伊藤博文の如き人物にては、大々的演説は到底爲し

得べからず、何となれば彼れには人を呑むの大威嚴無ければなり、故に淫欲と飲食とは演説者に於いて最も慎まざるべからず

○演説の秘訣は簡潔に在り、十分間のものを五分間に言へば、力を八分一に減じて倍掛けの勢力となり、一時間ものを十五分間に言へば、八倍から十倍勢力を強める譯なるを以て、簡潔なるだけ効力を強むる道理なり

○然るに素人は此の道理に通せず、徒らに長演説を爲して聽者を厭倦せしむ、演説中聽者に時計を出して時間を計らるゝは實に辯士の恥辱なりと云ふべし

○思想は栗の實の熟して落つるが如く、自然に腦中より流發し來らざるべからず、此の如くして簡短明潔に言ひ得べく、前後順序自ら整然たるべし

○演説は人に要求せられ、若くは時勢の必要に迫まらるゝまでは、決して自ら進んで爲すべからず、自ら進んで爲すの演説は多く失敗に歸するなり

○予は嘗て亞米利加に在る時、數々英語にて演説を爲したるが、固より不熟の事として文法上の間違ひ多くありしも、尙人を感動せしむるを得たり、蓋し演説は文章と違ひて、一たび演壇に立てば、其の態度即ち耳目鼻口手足、皆一齊に活動して夫れく意味を表現するを以て、言外にも人を感動するの作用あるなり彼の亞米利加の宣教師エリオットが、土人の知らざる英語を以て土人に、説教し遂に多數の信者を作り出だしたるが如き、蓋し右の理に由るなり、

○抑も演説は心のエレキを人に傳ふるものにて、我れに誠實の

心なきものは他に感動を與ふる筈なし、文章は大分隠るゝ所あれども演説は赤裸々にて蔽ふ所あるなし(談話に據る)

田中正造君

○演説は専門の頭腦必要なり、予は此の専門の頭腦無きが爲め、別に一種の専門的能力を作り居れり、即ち誠心正直等は、予が諸種の學識に代用する所の能力にして、予が演説壇上に於ける唯一の武器なり

○學問も必要に相違なけれども、演説を粗末にするは甚だ宜しからず、予は演説を爲す毎に、此くの如く原稿に苦心せりとして、信玄袋の中より筆削斑々たる草稿を取出して著者に示して曰

く、予が演説に就いて苦心の痕跡は是れに依て明白なり、予は苦心研究したる事柄にあらずんば、未だ曾て公衆の前に演説したるとあらず

○苟も公衆に向て演説せんには、生命を賭して言責を負はざるべからず、予が畢生の命符は言責の二字に在り

○矢鱈に多く演説を爲すと、拵事の演説は、辯士の品格に關すべきを以て、大に慎まざるべからず(談話に據る)

阿部磯雄君

○演説の練習に付き、心得べき事が大體二つある、一は形式的他は實質的である

○演説は一面より見れば、儘に技術であるから、形式的の事も決して輕んずべきでない、其第一に注意すべき點は音聲である、茲に音聲と云ふのは必ずしも高聲でなく、美聲でなく、寧ろ音聲の使用法を云ふのである、若し音聲が心中の情緒を表現するものとすれば、吾人の思想を他に傳へて、而も幾分の感動を與ふるには、音聲の使用を巧にするより外はない、音聲の緩急高低が自由自在になれば、聽者を動かし、或は聽者に快感を與ふるとは無論である、故に演説練習には、イロキエーションの稽古と、音樂の素養がなくてはならぬ、此二が我學校教育に缺けて居る限りは、我國に於て大雄辯家の起ることは望まれない

○第二は言語の撰擇排列である、始め演説を試みる時には、先づ言文一致で草稿を作るが善い、之を幾たび暗記して演壇に立

でば、無駄な繰言などを避くることが出来る、然し草稿を以て演説するのは、演説練習の爲には害があると思ふ、長さ演説を爲す時に筋書をして記憶の助をなすは差支ないが、朗讀演説はなるべく慎む様にせねばならぬ

◎第三は態度である、手足の運び方は言ふまでもなく、眼を常に聴者に注ぎ、殊に大演説場に於ては、時々眼の集注點を變じて、聴衆全體を見るときにせねばならぬ、亦演壇に上る時などは殊に其態度を慎むべきで、從容迫らずと云ふ心掛が第一である、音楽者が樂器の調子を合はせるときに、既に其人の技量が察せらるゝ如く、演説者が演壇に上る時の風采にて、幾分か其人の技量も察せらるゝのである

◎實質的の方面に於ては、吾人は第一に思想といふ事に注意せ

ねばならぬ、思想が淺薄であるか、平凡であれば流暢なる辯舌も餘り賞賛するには足らぬ、人を動かすものは思想であつて、形式ではない、要するに音聲言語態度などは、思想で他人に傳ふるの手段に過ぎないのだからつまり補助者である、若し思想が豊富であり、新奇であれば、形式的の事は少々拙劣であつても、尙聴衆者をして耳を傾けしむる事が出来る故に眞の雄辯家は、眞の思想家でなくてはならぬ、彼は常に新奇の書籍を讀むと共に、自己の心を練り、以て思想の原泉を養ふとに勉めねばならぬのである

◎演説は人に成程と合點せしめ、終には我心の情態を聴者の心にも現出せしむることを、理想とするのであるから、演説の準備を爲すに當りては、先づ此演説が我心を如何に動かすやと云ふと

を考へねばならぬ、別言すれば他人に向つて演説する前に、先づ我心に演説するのである、若し其演説が我心を動かすに足るものならば、必ず聴者の心にも感動を興ふるものに相違ない

○余が演説の練習法は、大略上に陳べたる如きものであるが、殊に最後の一ヶ條は、最も余が注意して心掛けて居る所である

(寄稿)

高橋秀臣君

○雄辯なるものは、辯舌用語の巧妙なるものを謂ふに非ずして、其事理を論すると正大に感化を興ふること洪大なるもの之を稱して雄辯と謂ふ、夫の徒らに、辯舌と用語の巧妙を尙ぶ如きは、

寧ろ辯の賊と稱して可ならんか、抑も雄辯なるものは、正廉の心術と、雄渾の識力と、慷慨の氣節、此の三者相待て始めて成功するものにして、夫の阿世の俗學や、輕薄の才子者流の決して企及すべき所に非ず、今や社會は、雄辯を要求すると最も切なるに拘はらず、敢て雄辯家の出てざるは何ぞや、豈志士濟世の本領を喪失したるが爲めならずや

○予は既往七年間身を政界に投じて全國を遊説し足跡殆んど海内に普く、此の間各地に演説すると七百餘回に及び、五回危難の身に迫まるに遇ひ、八回反對黨の襲撃を被りしも、是れが爲めに屈撓せず鋭進して今日に至りしが、今や公開の演説に於て其の自ら言はんと欲する所は十の六七を言ひ表はし得るに及び、而して予は自家の經驗に據りて熱誠より發する雄辯の力は

政界唯一の武器にして、金錢情實脅迫等の力を以てするも決して之を阻害すると能はざるを確信せり

○演說者の心得べき四大要件、演說は一種の教育にして又一種の戰鬪也、教育なるが故に、演說者先づ其心術を正明に持するを要し、戰鬪なるが故に、演說者其氣節を雄剛に保つべきを要す、演說者先づ其心と行とを此に存じ、而して後左の四件に注意せざるべからず

○其一、演說を爲すに當りては其の議論の組立に工夫を要す、蓋し演說の組立を工夫するは、猶ほ戰鬪の陣立及作戰法を工夫するが如く、多方面より材料を蒐集して、之を攻守の用に供し毫も遺算なきことを期せざるべからず、攻撃の演說は、正面より反對論の主腦部を衝きて其論據を破るを要し、説明の演說は、

論理及實例に據りて聽者に首肯せしむるを要し、煽動の演說は、正大雄渾、利害詳に、是非明かにして一點の私心なきを要し、其他慈善救恤等に關する演說は、條理正しく道義盡し誠を人の腹中に推すを要す、而して又聽衆の智識に高低の差あり、地に都鄙の別あり、智識の開けたる所に於ては、論理を高尙にして歴史的に例證を引くを要し、人智の開けざるの地に在りては、論理を卑近にして譬を俗諺に取るを可とす、其論旨は一なるも人を見て法を説くは、亦一種の便法たるを失はず

○其二、演說者の演壇に立つは猶ほ兵士の戰場に臨むが如く、即ち自己三寸の舌鋒に依りて發する所の辯論は、能く聽衆の疑惑を破り其賛同を得て之れを己れの味方とならしむるか、否らされば己れ其演壇に戰死するの熱誠と勇氣あるを要す。演壇は

實に立憲治下の公戰場にして演說者の死生を決すべき顯場たり、然るに、世には演說を苟もするの餘、演壇を以て辯舌を弄ふの場所となす者あり、心得違ひの甚だしきものと云ふべし

○其三、演說者は態度言辭の謹嚴明快なるを要す、蓋し演說者の態度言辭は皆演說の威信に關係する所以のものなれば、態度は直立儼然として懈態なく、音聲は腹心より出て大にして透徹するを要し、言辭は明快にして句々語尾を強くし、寸分の間隙なきを要す。殊に夫の政黨政派の演說にして、演壇の前、敵黨の人を以て満たさるの時の如きは、語言明快辯論流暢、所謂一瀉千里の勢を以て、敵黨をして批評を其間に挟むの餘地なからしむるを要す。

○其四、演說者は自ら多く演說を爲し、又多く人の演說を聴き

て修練をなすを要す、蓋し演說は不斷修練を積んで發達すると、猶ほ兵士の訓練に於けるが如く皆熟練に依りて進歩するなり。故に若し辯士にして其の言はんとする所の五割を順序能く言ひ表はす者は上乘の辯士を以て稱せられ、其能く七割を言ひ表はし得る者は、大辯士を以て稱せられ、而して其の言はんと欲する所を言ひ、論せんと欲する所を論じ而かも其言議皆發して要に中る者は、辯の至れるものにして、予は海内未だ此くの如き雄辯家あるを見ざるなり(寄稿に據る)

加藤咄堂君

○說教の目的は教義の宣傳に在り、如何にして教義を宣傳せし

むべきやと問へば、自己の信ずる如く他をして信ぜしむるに在り
りと答へざるを得ず、而して其方法たるや十分に聴衆の事情に
應用すべき所の言語を用ゐ、其の閱歷境遇及び知識を察して之
れに切當する説教を爲すに在り

○説教者の資格として信念の必要なるとは申すまでもなく、尙
外に缺くべからざる資格あり、即ち沈毅と大膽にして、説教者
沈毅自ら持し、既に進んで演壇に立つに及んでは、眼中王侯貴
人なく、身は教義の宣傳者たり、言ふ所は宇宙の眞理たり、佛
陀の福音たり、何の憚かる所あらんと毅然として自ら矜持せざ
るべからず、此くの如く大膽沈毅にして専ら讀書と人情風俗の
視察に頼りて説教の材料を蒐め、常に備忘録やうのものに其材
料を記入し説教の際此の材料に依りて組立つるとに心掛けざる

べからず、此の外尙注意すべきは國語の傑作を熟讀玩味する
なり、是れ蓋し言語修養の上に極めて必要なるものにて、西洋
の雄辯家がセークスピアの戯曲を暗誦して趣味ある言語を此に
取ると同一なり、獨り散文の傑作に限らず、和歌集や詩集など
も亦熟讀すると肝要なり

○説教の要素は即ち言語にて、説教を研究するには如何なる言
語を使用すべきやを考へざるべからず、予は是れに對して明晰
に優美に且つ勁健なる言語を使用すべしと言はんとなす、蓋し言
語の明晰は思想の明晰に基因するものたるは言ふまでも無けれ
ども、予は言語の明晰に就いては取敢へず、其純粹にして雅潤
なるもの、妥當にして意義を誤らざるもの、及び平易にして領
解し易きもの、此の三者を採用するを以て肝要なりと信ず、

○音聲を優美にし勁健にせんと欲せば、主として其の統一調和變化等に留意せざるべからず、統一とは聽衆をして明瞭に其の言ふ所を聽取せしめんが爲め、終始音聲の均勢を得るに在り、然も均勢の弊は平々淡々として趣味に乏しきを以て、此に變化の必要を訴へざるを得ず、變化は即ち音聲の抑揚にして、靜者は苔下の清水の如く、急者は岩を嚙むの奔流の如く、變化の中に統一あり、統一の中に變化あり兩々相俟て乃ち調和なるもの生ずるなり

○言詞を優美ならしめんには長音の言を要し、勁健ならしめんには短音の言を要す、春山を靄々として笑ふが如くと云へば自ら優美に、秋の山を四山骨立と云へば自ら勁健に聞ゆるなり

○説教の材料を組立つるに就いてノックス氏は三要素を説け

り、三要素とは一致、順序、進取是れなり、一致とは前後脈絡相通じて根本主意に一致せしめ行くなり、順序を正くすれば説明の混雜を避け聽衆をして其の言ふ所を領解し易からしめ、隨て説教に勢力を増加し得るなり、進取とは其の言ふ所の段々層々に耳新らしく聽衆をして倦むとを知らざらしむるを云ふなり、蓋し進取は言論に命脈あり、人心を感動せしむるものにして、羅馬のシセロが雄辯の本は進取に在りと言ひしは實に千古の格言なり、而して是等の要素を完全ならしむるには論理學に據りて明確に組織せざるべからざるや言を待たず

○説教に修辭の必要なるは是れに依て以て聽者の感動を深からしむるが爲めにして、クワッケンボス氏は修辭の利益を説明して曰く、事物を説明するに便利なり(一)二物を同時に言明して

混雜せざらしむ(二)詞格に威嚴を與ふ(三)感動を強くす(四)と例せば「花は美しい」と云ふを燦爛たる其の色、馥郁たる其の香と云へば一層人の感を強くするが如き、又は世の中の變遷定まりなきを桑田變じて碧海となると云ひ、老少不定なるを朝の紅顔は夕の白骨と云ふが如き、皆修辭の效果にて其の他是れに依りて類推すべし

○説教者の態度は音聲と共に必要なるものにて、佛教の雄辯法とも見るべき聲明には形、音、義を三種の學と稱し、態度に就いて注意を與へたり、故馬場辰猪氏の雄辯法には動作は言語と一致すべく手足身軀の位置を正くすべしと説示せり、無暗に手足を動かし身軀を捻るは説教者の品格を損ずるを以て、英國雄辯家の如く成るべく手足の動作を少くするを要す

○初心に登壇者は往々氣慮するを以て大膽にして聽衆を一呑するの氣慨なかるべからず、宗教改革の唱首たりしルーテルは初めて登壇せし時より何人にも眼を注がず、只若干の木頭我が眼前に連なるを見るのみと想像せりと云へり、ルーテルにして尙此くの如し、初學者豈大膽ならざるべけんや

○英人チャールズスベル氏演説家の心得を説いて左の如く言へり、初學者服膺すべきなり

- (一) 演説者は常に人を感動せしむるは其の意思に訴ふるに在るとを服膺し終始聽衆の好意を得るとを務めざるべからず
- (二) 演説者は先づ如何なる論法を以てせば最も聽衆を感動せしむるかを考へざるべからず、自己の思ふ儘の論法にては到底十分に人を感動せしむる能はざるべし

(三) 演説には慈眼視衆生の雅量なかるべからず、演説を善くせんと思ふことなく如何にせば一般に領解せしむべきやを考慮せざるべからず

(四) 演説者は博覧多識ならざるべからず

(五) 演説者は少しも故造作爲の状あるべからず、音聲態度皆自然に出づべし(談話に據る)

(著者曰く加藤氏曩に説教演説講習録の著あり近頃又應用説教學講義の著あり演説説教に志あるものは就いて見るべし)

武富時敏君

○演説は聴者に辛苦せず容易に領解せしむるを肝要とす、是れ

其の初め演説の組立てに於いて聴者の領解し易き様注意を要する所以なり、畢竟するに語辭平易にして事理明晰に順序能く整ふて辯士の熱心外に溢るゝものは演説として大抵成功せざるものなけん

○言葉の重苦しきは演説として美的觀念乏しきを以て自ら人を感動せしむるの力薄からざるを得ず、然も亦餘り輕きに過ぎてべら／＼喋舌り立つれば輕躁にして見るに足らず、要するに言葉の輕重は問題の大小にも關すべけれども、常に注意して輕妙に言葉を使用せざるべからず

○演説に草稿を用ゆるは其の前後順序を整へて聴者に領解の便利を與ふるの効少からず、加ふるに自分も亦是れに依て思想を鍛鍊すべきを以て、頭腦明晰に精密なる事柄も平易に聴衆の感

に入らしむるを得べし

○英國の議會にては近年演說往昔の如く盛んならず、隨て雄辯家輩出せざるに至れり、蓋し現今は演說を少數の聽衆に聽かしむるよりは、寧ろ之れを速記して廣く一般人民に讀ましむるの利益なるを信ずるに至りたればなり、故に辯舌は次第に拙劣となれるも演說の論旨は益精深雄渾となれり、蓋し聽を主とするの演說と讀を主とするの演說は自ら其の組織を異にせざるを得ざるべし

○材料の精選せざるべからざるは獨り演說に限らず、家屋の建築等に於ても、亦然るなり、結局演說の出來不出來は問題に在り、問題重大にして公共の利害に關係すると深ければ、辯士の熱心聽衆の熱心と、兩々相俟て演說も亦活氣ありて成績良好なるを得べし

るを得べし

○演說の最も難きは不得要領の事を長々と演說して聽衆を倦ましめず、演說後何事を言ひしか聽衆をして回慮する能はざらしむるに在りと云ふ、是れ蓋し政治家の妙作畧にして到底凡手の企及すべからざる所なり

○音聲の抑揚は甚だ困難なるものなり、能く聽衆に徹底せしと思ふ場合には何と無く胸に反響あれども、反響無き時は益聲を高くして愈難澁を覺え遂に見苦しき状態を現するに至るべし、時として慷慨悲痛の極壇上に絶倒するが如きは英國雄辯家にも嘗て其の例あり、然も演藝めきて面白からず、辯士たるもの宜しく何の求むる所無く平氣にて演說すべし、此くの如くなれば音聲態度自然に出て、窮迫すると無かるべし

○演説は人文の度合と都鄙の差別に應じて斟酌せざるべからず、神経の感通作用も人によりて遅速の差あり、老衰の人に向て大聲に語るも却て聞えざるが如き、演説者の平素注意すべき事柄なり、要するに都會は人智發達し居るを以て語調嚴急なるも領解し得らるべく、田舎は之れに反して緩々演説する方聽衆に適するなるべし

○態度は事柄に就いて感情の自然に現出するものなれば、特更に容態を作るは自然を害するの嫌ひあり、西洋人は日本人と風俗相異なるを以て其の演説振りも亦自然に殊ならざるを得ず、故に日本人にして彼の躍的演説の態度を模するは寧ろ滑稽と云ふべし(談話に據る)

田川大吉郎君

○演説には、蓋、三要あり、一、聲音の美、二、滑稽の妙、三、摸扮の巧、若し能く此三者を兼ね得る者あらば、必らず天下に覇たらん、

○然も完全を神諱むと謂ふは眞なり、今日の日本に於ては、此三者を兼ね得たるもの殆ど一人無し、其二者を兼ね得たる者すら極めて罕なり、僅に其一を有するものも寥々として少きこと曉天の星に似たり。其稍近きものを求むれば、島田三郎君、高梨哲四郎君の如きは其聲音の美を以て鳴る者なり、傳へ謂ふ處翁に銀音朗々の響ありしと、余は高梨君が壇に登つて、長髪を振ひ肩を聳かして、酣罵縦横する場合に、屢々之を思ひたり、

所謂銀音朗々とは此種の聲を謂ふかと、尾崎行雄君の辯に名あるは、寧ろ其態度に在り、其詞鋒に在り、其趣致に在り、然れども聲音も亦確に君の演說の美の一要素を爲す、井上角五郎君の聲は美と謂はんよりは寧ろ饒かなり、宛轉自在なり、而して稍嬌味を帶ぶ、是れ其動もすれば俗人の歡情を買ひ得て、正人の咨嗟を招く所以なるが、然れども井上君も亦確に其天授の音を以て演說の妙を爲す者なり、

○基督教界に在つて、海老名彈正君の如き、亦其美音を以て鳴る者なり、優にして上品なる聲音に、いつか人知れず人を動かす天稟の妙調あり、是其議論以外、思調以上、多く人を動かす所以と思はる、

○滑稽の妙を以て其演說の美を爲す者は、余は今日の濟々たる

多士の中に、殆ど其誰あるかを知らざるも、曾て聞ける所に就て強めて之を求むれば、黒岩周六君は其人に非ずや、談理の詞中、往々其様の機智を見る、木下尙江君も尙其中の一人なるべし、或は思ふ、龍野周一郎君も其一人なるべきかと、但、龍野君、及び其以下の人々の辭中には、往々卑俚の句ありて、清興を破り、潜思して聞くに堪へざる場合あり、黒岩君が理趣の人を以て、深刻の辯を使ふ半ばに、此妙あるは、甚だ尊ぶべしと思ふ、余は此點に於て、黒岩君の演說に若干の尊敬を拂ふ、徳富猪一郎君の辯舌も聞ける人は皆之を許すならん、文章の上手は勿論ながら、演說の技術も亦凡ならず、寧ろ文章以上の美を顯すこと有り、少くとも其高熱を顯すことに於ては、常に其文章以上に在りと、所謂才人往くとして可ならざる莫きもの、只

管畏れ入るの外は無きが其妙味の中には、又所謂滑稽談諧の趣あり、人をして油然歎笑せしむ、

○摸扮の技倆ある者に至つては、天下其れよりも更に少し、松村介石君は其乏しき中の稀に有る一人に非ざるか、君、壇上に登れば、壯士の言を壯士らしくに行り、車夫の言を車夫の言らしくに行り、馬丁の言を馬丁らしくに行る、總て第三者の言を第三者の言らしく行る所に、甚しき妙味あり、是蓋君の檀場か、但、君の此の如き詞態は、重に豪傑的性格の人物を形容する場合に於て其秀妙を見る、聖人、君子、學者、宗教家の場合に至つては、口吻類せず、又憾むべし、押川方義君の如きも、亦稍此方面の技倆を有する者と謂ふべし、然も押川君は直に自己を以て他の擬人を掩説し去るが故に、摸扮の妙即ち顯れず、或は謂ふ、

小池平一郎君も亦此種の技倆ありと、未だ聞かざるが故に眞に然るや否やを知らず、兎に角、此點に於ては、我邦の演説者は、概して之を欠けり、殆ど未だ其人を見ずと概論するも不可なし、彬々たる文運、此に至つて甚だ恨むべきを思ふ、

○聲音の美は學んで致すべからざるか、否、滑稽の妙は學んで致すべからざるか、否、摸扮の巧は學んで致すべからざるか、否、三者齊しく天分の助けを借るといへども、然れども學んで致すべき領分少なからず、而も今の演説者は之を學びつゝありや、學ばんと志しつゝありや、學ぶの必要を領會しつゝありや、余は其或は之なきに非ざるやを見る毎に失望驚訝に堪へざる者なり、

○獨り之のみに非ず、余は邦人の動もすれば、格別の用意なし

に、演壇に顯るゝこと有るを怪事と思ふ、漫然として之を聽けば、紛々たる談話、淀みなく、際涯なく、説き去つて縦横の論鋒、其人の才氣を見る、氣焔に少しの不足なく、態度も、どこかに熱烈の風を帯び、聽衆は面白おかしく聽き流し、而して一二時間、肩の凝ることは勿論無く、一回の欠伸だに催さざりし以上は、以て好演説と謂ふべきに似たるも、然も其一二時間に説き去りたる所は何ぞや、理路を逐ふて、其尙論せし跡をたづぬれば、茫として雲煙の把握すべからざるが如きもの極めて多々、獨り聽衆の此感を催ふすのみならず、演者に就て質すも、亦何を言ひしか、誤魔化せしかを知らざるが如き場合少しとせず、太だしき怪事に非ずや、

○但聽衆の中には此の如き演説を喜ぶ聽衆なきにしも非ざるべ

し、或は草稿をこしらへ、其思想を調べて、其字句を練り、縝密の用意して、演説に立つものあれば、以て未熟、無能、迂濶、憶病の演者と爲すの流風も有るが如し、好き聽衆あつて、好き演説者起る、邦人果して好き演説者を欲するか、聽衆自ら其心意氣を洗新するの必要なきに非ざるべし、

○好んで人を難ぜしも、余に於ては固より何等の得たる所なし、曾て人あり余に告げて曰く足下の演説は餘りに聽衆を重んじ過ぎ、今一段、聽衆を軽く視よ、心持らくに爲りて、詞鋒も亦大に伸ぶる所あらんと、或人の言善し、是誠に余の演説の弊なるも、只、余の演説を爲して、喜ぶ所は、聽衆の拍手に非ず、其謂はれなき喝采に非ず、況して其嬉笑動搖の態に非ず、余は余の眼と聽衆の眼と相接して、互に神契したるらしき瞬間の機會ある

ことを満足とす、即ち、余の演説は聴衆を浮き立たしむることを以て目的とせず、聴衆を動搖めかしむることを以て至願とせず、寧ろ聴衆をして神を澄まし氣を靜にしさは立つ心を押し鎮めさする瞬間あることを以て理想とす、幸に此瞬間あれば、余の勞は酬ひらる、若し遂に此瞬間なければ、余の一時間の骨折は即ち徒勞に終る、余は只此志を以て演場に立つが故に、聴衆を重んずるは即ち自然にして其所のみ、而して余は今の世に余と志を同じくする演説者の甚だ少さが如きを恨む、然り、余は余の演説の甚だ不景氣なることを知る者なり(寄稿)

天野爲之君

○演説と草稿との關係は緊要離るべからざるものなれども、予は從來演説を爲す毎に草稿を作らず、只だ腹案の儘に演説するを例とせり、

○故小野梓氏の如きは、演説を爲さんと欲すれば先づ鄭重に草稿を作り、是れに據りて友人等を會して自ら演説の下稽古を爲す等苦心用意至らざる所なかりしが、今日氏の演説遺稿を讀むに其の文章堂々として誠に立派なり、惟だ其の文章に偏して言葉の趣味少きは演説として稍缺點なるを覺ゆれども、後世に遺存せらるゝの演説は此くの如く草稿に力を致さざるべからず

○英國にては古より學術演説に限りて草稿を朗讀し、朗讀終りて後之れを新聞雜誌等に掲載せしむるを以て慣例となりあれども、日本にては全く之れと相反して草稿を朗讀するものは、無

調法として人に嘲笑せられ、且つ其の演說筆記も演說者自ら筆削訂正して後之れを新聞雜誌に掲載する等、英國に在ては正しく無禮として撥斥せらるゝ行動が日本にては却て平氣に行はれつゝあり、演說後に其の字句を訂正するは如何にも不穩當なるを免れざるべし

○先般早稲田實業學校開校式に於いて、矢野次郎氏の祝詞を代人が朗讀せられしが、其の祝詞たる普通儀式的のものにあらずして一種の意見書なりし上に、朗讀の巧妙なりしが爲め頗る聽者に感動を興へたり、予は普通演說中寧ろ朗讀を代用するの得策なるもの多くあるを認めて疑はず、蓋し朗讀は専ら草稿に力を致すを以て思想精確に事理明白なるを得べし、日本にも昔は此の朗讀法行はれたるとあり

○如何にせば自分の考へを聽者に分からしむるを得べきや、予は先づ以て此の點に就いて演說を組立て面白き譬喩を引いて説明するとに注意し、聽者をして苦も無く自分の意見を領解せしめんことに苦心せり、是れが所謂注意の經濟にて演說者の心得ゆべき所なり、

○予は文章を書く毎に、家内や小供等をして之れを一讀せしめ、其果して他人に領解せらるべきや否やを試み居れり、他人が讀んで分かるものは之れを取て演說するも亦聽者に分かり易き筈なり、予の演說の多くは自作の文章より來たるものにして、演說の文章に先だつとは殆ど稀れなり、故に文章にて分らぬ事を演說するとは決して之れ無きなり、

○感情に訴へる政治上の演說は爲し易きものなれども、經濟上

の事に至ては其の説明方に就いて十二分に工夫を凝らさざれば
 聽者に分からしむる能はず、此の兩者は決して同日の談にあら
 ざるなり

○講義は生徒に成るべく疑問を起させて自ら之を解答せしむ
 るを可とす、故に講義に流暢の辯舌を用ゆれば、生徒は煙に捲
 かれて、一向要領を得ずに了るべし、之れに反して演説は流暢
 の辯を用ゐて聽衆を我が意見に同化せしむるを必要とす、左れ
 ば講義は研究的を主とし、演説は説得的を主として彼此判然區
 別あるを見るべし

○嘗て壯年の時外國の演説書を見て之れを學修せんと企圖せし
 も、何分其の言葉の組立等異なるが爲めに、名家の演説口調も
 之れを模寫する能はずして失敗に終りたり

○近年英國の議會は所謂言達して已むと云ふ流義となり、昔時
 の如く三晝夜に及ぶと云ふ美文的の大演説無なきが如し、チエ
 ンバレーン、バルフォア等の演説も皆簡潔にして長時間に及
 ぶものあるを見ず、蓋し時勢の變遷然らしめたるものならんか、
 (談話に據る)

植村政久君

○演説を爲すに就いて草稿を作るは宜しけれども、草稿を持って
 演壇に登るは不可なり、然も登壇の際には演説の順序なり、若
 くは統計上の數字、或は一字一句を誤るべからざる他の文章語
 句を引用するが爲めに扣えの書箋を持參するは可なり、予は演

説に先んじて大體の順序要領を記し、演説に對しては速記又は筆記を作らしむるを慣例とせり

○草稿を作るの利益は、散漫空漠なる思想も緊切に締りが付くを以て、精密を缺き亂雜に流るゝが如き弊害無かるべし、若し草稿に寫さず單に言葉のみを以てせばツマラヌ事も價值あるが如く聞ゆれども、試みに之れを草稿に寫せば價直の有無直に分明するなり

○グラットストン初めて國會議員となりし時「國民と教會」と題する一書を著はせしが、マコレーは此の著述に就いて青年政治家の好覺悟を稱揚せり、蓋し政治家の演説のみに偏するものは其の思想亂雜に流れ易し、故に精密にして健全なる思想を保持せんには、著述に依りて之れを鍛鍊せざるべからずとの意を

示せるなり

○マコレーは一の巧妙なる譬喩を引用して曰く、古へ希臘人法廷に事あり、有名なる辯士に就て己れの辯護状を作らしむ、被告辯護状を復讀數回然る後辯護の効力無しとて、更に有力なる辯護状を作らんとを求めしに、辯士は笑て答へて曰く、子は讀むが故に効力無きのみ之れを人に聽かせば驚くべき効力ありと、讀むと聽かせるとの區別知らざるべからず

○今日は政治家中有名なる辯士も、學力の修養を怠り思想の涵養を事とせざれば、遂に時勢後れとなりて折角の雄辯も世間に勢力を保持する能はざるに至るべし

○聽衆の我れに對しては極反對者なるか、若くは熱誠なる同情者なるか、此の二者なれば辯士も頗る演説を爲し易し、極反對

者に向へば辯士も亦勇氣を作興し、戰闘準備を爲して進撃すべく、又熱誠なる同情者に對しては滿潮に舟を行るが如く平穩に愉快に演説を爲し得べし、然も反對にもあらず同情者にもあらずる彼の冷淡水の如き聴衆に向ては辯士も亦實に窮せざるを得ざるなり

○演説を爲すの辯士に在て其の言論を苟もするは甚だ不可なれども、聴衆に於ても亦社會的徳義を遵守せざるは不都合なり、演説を聴くに宛も演劇や寄席へ行つて娛樂を取るが如き態度心事を以て辯士に對せば、演説の價値も亦自然下落せざるを得ず、社會的徳徳の養成は今日の聴衆に對して特に必要なりと思ふ

○今日の演説者は生葡萄酒の如き純粹健全なる演説を爲すもの少し、○○○○の演説はラムネ的に、△△△△はブランドー

的なり、予は生葡萄酒的の純粹健全なる演説を嗜好す

○演説は巧拙に拘はらず、成るべく大會場に於て數々爲すべし、音聲の修養に就て利する所多かるべし

○演説の始めに於ては宜しく呼吸を腹一杯に入れて氣合ひを豊にすべし、初めから腹部を空虚にして氣合ひを抜き去らば、其の演説必らず不出來に終るべし、腹部に呼吸を入れるは猶商賣の資本を放下するがごとし、演説中拍手喝采ある毎に十分呼吸を入れ代えて氣合ひの補充を爲さざるべからず(談話に據る)

大岡育造君

○予は從來草稿を持って演説を爲せしとなかりしが、近來は草稿

の必要を認むるに至れり、元來演説を爲すに就て、其實自ら信仰して疑はざる事を是非共發表せざるべからずと思念し、全力を込めて演説せんと思ふ程の問題に至ては草稿を必要とせず、何となれば此くの如き思慮習熟したる事柄は我れに在て草稿を作るの必要無く、聴者に在ても問題が重大なるだけ自然に注意を爲すと深く理解するとも容易なればなり

○然るに時勢進歩して演説者の目的とする所も益々重大となり、事柄の關係も大切となるに及んでは、單一なる感情のみを以て聴衆に説く可からず、是に至て統計上の數字も必要なるべく、書類の引用も必要となるべければ自然草稿を要するとならるなり、此くの如き事柄を無理に暗記して演説するは實に見苦しきものにして、特に草稿を懐中しながら暗記的に演説するは

其の効能甚だ薄弱なり

○草稿を作るに就いては、近時内閣員の如くナニ／＼でござりますと云ふまで盡く草稿に認むるの必要は無論之れ無く、只だ大體の骨組みを作り、其の各項の下に必要な數字と書類を記入して可なり

○演説は畢竟聴衆の程度を測て之れに應ずべきものなれば、調子の高低に従ふて演説も亦高下せざるべからず、假令ば帝國議會の演説と、府縣會議員の選舉演説は、聴衆の調子非常に異なるを以て演説も亦聴衆の理解力に應じて高下せざるべからず、故に草稿を株守して一樣に演説を爲さんとせば必らず聴衆との釣合ひを失して、不結果に終るべし、我代議士中某君が常に一本調子にて聴衆に演説するは予の感服せざる所なり